

周恩来の誤算

——顧順章事件の真相（三）

松本英紀

目次

- 1 顧順章の「叛変」
 - 1 つくられた事件―党史から見た顧順章事件
 - 2 波紋 i―総書記の逮捕
 - 3 波紋 ii―ノウレンス事件
 - 4 波紋 iii―伍豪啓事事件（以上第五九八号）
 - 5 周恩来と顧順章
 - i 顧順章の登場
 - ii 李立三路線と顧順章
 - iii 顧順章の追放
- 2 顧順章事件の真相
 - 1 顧順章の逮捕（以上第六一九号）
 - 2 董健吾「脱険」記（以上本号）
 - 3 誰が顧の叛変を知らせたか
 - 4 その後の顧順章、錢壯飛、董健吾
- 2 董健吾「脱険」記

四中全会での党内の騒動がやっと静まった三月の末頃、董健吾のもとに突如、周恩来から鄂豫皖ソ区（湖北・河南・安徽の省境にある大別山根拠

地）へ出向する張国濤、沈沢民に随行するようという命令が届いた。

それから何日かたって、周恩来が出発に際して一度会いたいといってきた。周恩来はひとりで出向いてきた。董健吾とは面識はなかったにもかかわらず、じきじきに遣ってきたのは、董健吾に重要な任務を伝えるために違いなかった。周恩来は会うなり、「顧順章を助けて護送の任務を完成し、また漢口で顧順章のために身を保てる安全な社会関係を手配しなさい」と懇切に告げた。これだけの話なら、別段、秘密裡の会う必要はない。特科の組織から追放された顧順章のために身を保てる安全な生活の場所を董健吾に探させるといふのも妙なことだった。すでに述べたように、顧順章は魔術団の一座を率いて何度も漢口に来て、各地で公演しながら党中央と各地の交通網（れんらくネット）を開発していた。だから安全な生活の場を探すなら、顧順章のほうをはるかに事情に通じていたし、そもそも董健吾に托するまでもないことだった。しかし、周恩来はこの会話の中で、「何度も顧順章に深刻な懸念を表し、董健吾に、彼の面倒を見るのに、かみならず警戒心を高め、よく敵の行動に注意し、さらに自己の情況に注意して、軽率を防止し、盲目を避けるようにしなければならない。いったん、異常に気づいたら、随時、上海の党中央に報告するよう」にと念を押した。

うえの話は、董健吾の公式伝記を書いた周蕙の「董健吾」（《中共党史人物伝》第68巻）によっている^①。ただ、周蕙もそっくりそのまま、鄭先海の

『董健吾漢口脱險記』（以下『脱險記』とする）を援用している^②。ただ、周蕙は故意に顧順章の身の振りかたに苦慮する周恩来の厚情心を強調し、顧の追放が転任であつたように解釈して、巧妙に周恩来の密談の企図を歪曲した。じつは、鄭先海はこう述べていたのだ。

「周恩来は、董健吾を同行させ、掩護の責任を負い、かつ董健吾の漢口での社会関係を通して顧順章らの身を隠す処を探させることにした。……周恩来は董健吾に任務を交待したとき、顧順章にたいする憂慮を表して、董にかならず警戒心を高めて、敵人に注意し、自己を保護して、軽率な行動はひかえ、異常な情況に気づいたなら、機を逸せず上海に報告しなければならぬ」。この「周恩来の言外に匂わした真意は、董健吾に顧順章を監視、保護する責任を負わせることであつた」。

周蕙は、この周恩来の「言外に匂わした真意」のくだりを故意に記さず、顧順章を漢口に赴かせたのは、単に特科の工作から護送任務に転任させることだけだつたと述べて、周恩来の肅清計画の陰謀を秘匿したのである。だから、顧順章の道中の計画を記すだけで、董健吾の具体的な行動は書かなかつた。かくて周蕙はこう話をつづける。董健吾は漢口に着いたあと、自己の任務を達成するのに忙しかつた。当時、漢口既済水電公司の経理であつた同級生の劉少岩を訪ね、その家に寄宿することにした。数日後、信頼できる「社会関係」を探し出し、そこに住むよう伝えた。周蕙がいう「社会関係」とは身を隠す場所であつた。すなわち、周蕙は、漢口での董健吾の任務が顧順章の住まいを探すことだけであつたように語る。これでは周恩来がなぜわざわざ董健吾を訪ねて、どんな命令を伝えたのかの説明になっていない。しかし、周蕙のこのような説明は、却つて董健吾にほかに重要な任務があつたことを暗に語るようなものだつた。

鄭先海が書いた『脱險記』は漢口における董健吾の足取りを克明に記

した「記録」であるが、作者の鄭先海とは何者なのか、董健吾とどのような関係があるのか、何を根拠にして書いたのか、どういう目的で書いたのかなど、文章そのものの意図がまるで分からない。しかし、顧順章事件の処理に董健吾が一定の役割を果たしたと説く伝記作家は、周蕙の「董健吾」を含めて、鄭先海の文章を拠りどころとしてさかんに引用した。この記録の内容を含めた信憑性については、後に詳しく検証することにするが、ここで、董健吾の漢口での足取りを追うまえに、党の文献を自由に見ることのできた党史作家の王光遠の記述をもう一度見ておこう。董健吾の漢口行の目的をより明白に述べている。王光遠の『紅色牧師董健吾』は漢口での董健吾の足取りをこのように語る。

「張国濤らの武漢行を護衛するために、周恩来は中央政治局委員、中央特科の指導者顧順章を責任者に、董健吾を助手として随行させることを決定した。張国濤の黨員経歴は老く、名声は高かつたが、しかし、かならずしも政治局委員を派遣して保駕させることはないし、顧順章を派遣するうえに、さらに董健吾を助手として同行させる必要はなかつただろう。しかし、周恩来がこのような手配をしたのは深い含意があつてのことだつた。

顧順章の思想と表現^{たいびん}によつて、周恩来は中央から調離^{ついでり}する意図で武漢に行かせたのは、彼にたいする一次の試練であり、董健吾を加えたのは、一つには張国濤を護衛するためであり、もう一つは顧順章を監視するためであつた。彼らが出発するまえに周恩来は董健吾を訪ねて、いちど単独^{ふたりきり}で談話^{はなしあひ}をし、警戒心を高めて、順調に任務を達成する責任を負わねばならないと懇切に告げ、同時に注意して自己（の安全）を保護^{まも}り、（顧順章に）異常な情況があつたら、ただちに中央に請示しなければならぬと忠告した。

董健吾ははっきりと周恩来の意図を理解し、今回の任務の責任の重さ

を深く感じた^③」

王光遠は周蕙より詳しく実情を語ったが、しかし、周恩来の「深い含意」については、じつさいは周恩来の命図の意図を知っていないながら、どうして特別に「警戒心を高める」よう注意し、「自己の安全を保護する」ように言い聞かせなければならなかったのか、なぜ顧順章に「異常な行動をとる」ことが予断できるのかなどについては、言葉を濁して十分な説明をせず、周恩来はなぜ顧順章の助手に董健吾でなければならなかったのか、言い換えれば、顧順章を監視するのになぜ董健吾でなければならなかったのか、という根本的な問題については、結局、何の説明もしなかった。

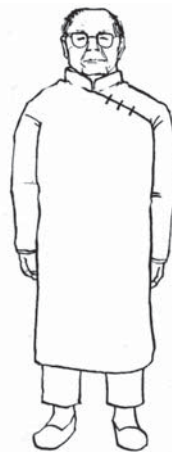
そもそも董健吾は顧順章の助手としてほんとうに漢口に同行したのであろうか。党史作家の書き方は微妙に食い違っている。

さきに引用した張国濤の回想録には、同行者の中にただ助手とだけあって、董健吾の名前は出てこなかった。張国濤から見ると、董健吾は眼中になかった、あるいは董健吾という人物そのものを知らなかったのであろう^④。すると、周恩来が発前に董健吾に命じた護衛の任務を完遂する命令ははじめからなかったことになる。残るは監視の役目だけであつた。

張国濤は周恩来の陰謀を知ってか知らずか、顧順章の情報員としての能力を高く買い、彼の護衛に全幅の信頼を寄せた。張国濤が武漢へ行くのに、顧順章は特科紅隊から人手を繰り出して張国濤、陳昌浩に随行して上海から船で出発し、顧順章は一足先に上海から汽車で南京に向かい、南京から船で武漢に行き、前もってソ区潜入の手配をするという計画を立てたのであつた。

漢口での董健吾の行動を克明に記した鄭先海の文章には、董健吾が張国濤に随行したとはどこにも書いていない。ただ、董健吾は、「三月三十日、魔術団の一座に扮した顧順章に同行し、四月三日に一行は漢口に到

着し、四日の午後六時に張国濤、陳昌浩を引き取って日本租界の秘密連絡拠点に住まわせた」と述べるだけであつた。しかし、董健吾の存在を意義づけるために、出発する際の董健吾の出で立ちを印象づける。彼は、黒い大掛チャンジャンを着て、背が高く、角刈りの頭で、両手に魔術道具を入れた籐箱を提げていた。一行は夜陰に乗じてイギリスの汽船に乗り込んで漢口に向かった。



大掛

中国語辞典 角川書店より

前出の王光遠は、張国濤の護衛任務に関して顧順章は次のように手配したという。彼はよく知っている野鷄船やみぶねを探し、四月一日に上海から武漢へ向かい、彼は徒弟の張増謙、陳蓮生を率い、三月三十一日に先に汽車で南京に行き、さらに船で武漢に行った。同じ日に、董健吾

が張国濤と接触して南京路の新世界旅館に行き、二日目の早朝、地下党が自動車を派遣して彼らを埠頭に送って船に乗せた。このようにして、顧順章は一日早く武漢に行つて必要な手配をすることができた^⑤。

董健吾は張国濤に付き添って乗船したあと、陳昌浩も到着し、船上では張国濤は老おわたなのしゅしん板いたに扮し、董健吾と陳昌浩は番頭に扮した。船内の客は多くなく、役人でもなく、庶民でもないように見られ、アヘン販売の大商人に疑われた。張国濤はそこで相手の裏をかくて同乗の人と麻雀をして、わざと数百元を賭け、ほんとうの博打に大金を使う大商人のふりをした。

王光遠には董健吾の評伝（『紅牧師董健吾』）のほかに、なお『浦江魂』を書いて上海時代の周恩来の行動を描いた。そこでは、顧順章が武漢に

赴く様子をより具体的にこう述べる。^⑥

党中央は張国濤、陳昌浩らを鄂豫皖ソ区に派遣して工作させることにし、また顧順章、董健吾、陳蓮生ら六人を護衛に命じた。顧順章と牧師に扮した董健吾はいっしょに、三月末、早めに出発し、武漢に行つて手はずを整えた。張国濤らは四月一日に船で出発し、四日、武漢に到着し、七日、改めてバスに乗つて李家集に行き、さらに転じてソ区に入った。

同じ作者の著書なのに両者の間に大きな食い違いがあった。王光遠は、董健吾を同行させた周恩来のほんとうの策謀を知っていたに違いない。しかし、それを故意に粉飾して真相を覆い隠そうとしたのであろう。

張国濤らの一行がどのような顧順章の手配と手段で漢口へ出発したかは董健吾の役割を知るうえで重要な手がかりであったが、上海出発からずっと顧順章の行動を監視していた李強は、彼らが利用した船について、後年（一九八一年十月）、ある座談会でこのように語っている。

「我々の同志は汽船で行つたのか？ 乗客の人が、張国濤が何者かを知つたら、逃げるに逃げられないではないか。だから陳某の友人として、その船に乗つたのだ。その木造船は切符を売らなかつたのだ。上海で製材された木材を積んで武漢に運送し、そのあとふたたび積んでかえる。だからどんな人も何者か問われることなく、船では、我々は多くの重要な人物、重要な物も上海に運べる、痰つほでさえ、（笑）話ではなく、事実だ―原注）すべて上海に運搬する。この船の船頭は、この同志は寧波の人で、姓は陳といったが、名字は知らない、当時聞かなかつた。彼はたくさんさんの工作をし、漢口では米を買えなくても、買いに来て、蕪湖について、多くの蟹を買つた。一九二七年、私はいつもこれを使い、三一年になつても、まだいつもこの船を使つていた。そのあと、顧順章が張国濤を鄂豫皖ソ区に送つた時に乗つたのもこの船だつた。^⑦

李強はうえのように、張国濤、陳昌浩が乗つたのは中央特科が管理し

ている老朽の木材運搬船であつたといひ、この船は上海英租界工部局の英国商人が登録している洋泰木行の貨物船で、イギリスの国旗を掲げ、上海から木材を積んで運ぶだけで、切符は売らず、一般の客は乗せなかつたのだという。この船には李強がいったように寧波出身の船頭がいて、彼は共産党員であつた。共産党の責任者たちはいつも陳の友人という名目で、この船に乗つて行き来した。この話は張国濤の回想とはずいぶん違う。だからと言つて、張国濤の回想がすべて作られた話とは言えないが、重要なのは、情報工作は本来的に不透明な、隠蔽活動であつて工作の成否はたたちに生命の安否に係わつた。したがつて当事者はそれぞれの立場で記録を残したが、そこにはとうぜん表現の食い違いがあつた。表現の違いの間隙から如何に真実の一片を見出すかが重要となる。

ところで、一九七九年に董健吾の「歴史問題」が糾されて名譽を回復すると、不問に付されていくつかの事実がしだいに明らかになつてきた。二人の子どもが書いた『神秘的紅色牧師董健吾』は、董健吾の生涯を顕彰する私的な著作であつたが、王光遠の『紅色牧師董健吾』とともに董健吾に関する代表的な評伝となつた。^⑧ 子どもたちが書いた父親の伝記であるから歴史の真実をすべて求めることはできない。董健吾にはまだ公表できない真実が多くあつた。顧順章事件における董健吾の役割もその一つである。しかし、親族といえども党の支配下で生きていくには党史からはみ出す事実は書けなかつた。子どもたちは父の伝記を刊行するに当たり、「中共中央党史研究室劉益濤主任と北京市委党史研究室吳家林主任の評審と修改意見」を受け入れねばならなかつた。王光遠によれば、董健吾には二種の自伝が存在するらしい。『董健吾自伝』と『自述』である。前者は上海市委統戰部（中国共産党上海市委統一戰線部）にあり、後者は董寿祺、董雲飛のところにあるという。公開できないと

ころを見ると、党の見解に都合の悪いところがあるに違いない。しかし、周惠と王光遠は見る事ができたらしくさかんに利用しているが、公表できないところは事実を糊塗してしまった。

では、董霞飛、董雲飛の『神秘的紅色牧師董健吾』には董健吾の漢口行をどのように書いているのであるのか。董霞飛らの記述は王光遠と内容の大筋はほぼ同様であるが、表現に微妙な違いがあり、そこに真実の一端が垣間見えるように思えるので、前出の記述と重複するところがあるが、以下にしばらく引用して見よう。

ちょうど張国濤らがソ区に潜入するルートの選択に思索していたときに、中央中共は、張国濤一行を護送する任務は顧順章が担当し、かつ董健吾を同行させることに決定した。

行前、周恩来がとつぜん董健吾に面談したいと伝えてきて、董に任務を告げ、さらに直接秘密の行動指示を与えた。董健吾の任務は、顧順章が任務を執行するのを掩護し、また董の漢口での社会関係によって、顧に身を蔵すところを持たせて、工作の創造条件にするというものであった。周恩来は任務を布置したときに、顧順章にたいする担心を流露し、董にかならず警惕を高め、注意して自己を保護し、(顧の)盲動に反対し、軽率を防止し、もし異常な状況を発現したなら、適時に上海の党中央に報告しなさい、というものだった。周恩来の言外の意は、董健吾に顧順章にたいする監護の責任を負わせることだった。

董健吾は任務を授けると、自発的に顧順章といっしょに張国濤と陳昌浩を護送する措施と方法を研究した。当日の黄昏、顧順章は張国濤を訪ねてこう告げた。「四月一日、滬漢を往復する野鷄船があり、漢口に出航する、老板はわたしと熟知の者である。あなた方は普通の商人に扮装して下さい。わたしは人を手配してあなた方を船に乗せませ

わたしたちは一足先に出発し、漢口で人員を物色してあなた方を黄安に送り届けることにします」。張国濤はうなずいて同意した。

三月三十日の夕暮れ、軽装の魔術団一行が上海から出発した。座長の顧順章は、江湖人の装束であったが、ただ両眼にはかれ特有の秘密で察知し難い表情が表れていた。かれの傍に立っていた二人は、一人はかれの助手で特科紅隊隊員の張増廉で、顧順章の魔術の弟子でもあった。もう一人は董健吾で、黒い大掛を着て、背が高く、角刈りの頭で、片手に魔術道具を詰め込んだ藤箱を提げ、眉のあたりに機智が潜んでいた。かれらは夜色に乗じて、イギリスの汽船に乗り、漢口に向けて走っていた。

四月三日、顧順章一行が漢口に到達した。董健吾は顧と、数日後にはきつと頼れる社会関係の家に住めるよう手配すると約束し、それまで、董はしばらくの間、時漢口の暨済水電公司経理であった劉少岩の家に住み、顧は漢口怡園近くの新世界飯店に投宿し、かつ濱江一角の埠頭で出会う時間を取り決めた。

顧順章は四日午後六時に張国濤、陳昌浩を日本租界のある秘密の連絡点に連れて行って住まわせた。七日、顧はまた張、陳を鄂豫皖ソ区から派遣されてきた交通員に托して、かれらにソ区へ進入させた。

上記に挙げた各種の董健吾の漢口行の記述を見ると、張国濤の『回想録』と鄭先海の『脱險記』が基本的な材料となっている。しかし、董健吾は何故、顧順章に同行することになったのか、周恩来は出発に際してどんな任務を与えたのか、董健吾は誰と漢口に出発したのか、漢口でどんな行動を取ったのかなど、党史作家たちはそれぞれの立場で上記の材料を書きかえた。

董健吾が顧順章に同行して漢口に赴いた目的は、うへの記述から見れ

ば、顧順章の任務の遂行を掩護することにあつたという点は共通するが、もう一つの董健吾の任務は曖昧な言葉をくり返した。党史作家たちは周恩来が董健吾に言い含めたもう一つの任務の真意をどのように糊塗したらいいか苦心した。これは後になってのことであつたが、作家たちは周恩来の命令の目的を知つた。だが現実の党の路線を正当化するために党史作家たちはあれこれ考慮せねばならなかつた。そこで顧順章の漢口への出向を単純に職場の移動と解釈することにした。董健吾の役割が顧のために頼りになる社会関係の処を心配することにあつたとか、董健吾の漢口での社会関係を通じて顧順章らに身を隠す処を持たせることであつたと説明したのである。しかし、しばしば述べたことだが、共産党の用語では、「調離」は単なる職場の移動とか転勤ではなく、党との関係を断絶する、党組織から離脱することを意味した。党との関係を断つことは、それ自体で身の危険を生じた。命令した方から言えば、党からの追放であり、肅清であつたのである。党史作家であれば、こういう実態はどうぞん知つていた。だからこそ、「社会関係」の意味をことさら曖昧な表現にした。周恩来が顧順章を党組織、特科から追放する目的で張国濤の護衛を命じたのであれば、董健吾の任務はあくまで顧に対する厳重な監視でしかなかつた。董健吾は漢口での顧順章の挙動の一部始終をしつかりと見張り、それをおそらく国民党当局に随時、伝えることが重要な任務であつた。そのため顧順章の住いを探してそこに止めておく必要があつたのである。とすれば、董健吾は先に出発した顧順章に同行したはずであり、王光遠は稚拙にも張国濤に同行したように改竄した。

ところで、周恩来がどんな任務を董健吾に命じたかについては、すでに別稿において、周恩来の計略を推測したことがあつた。ここでは次のように述べておいた。^⑩

周恩来がわざわざ董健吾を訪ねて伝えた任務は、すでに肅清される気

配を感じている顧順章を注意深く監視し、張国濤らの護衛の任務が終えたあとに、顧順章がどのように国民党当局と連絡を取るのかをよく見とどけて、敵に寝返るような素振りが見えたら即座に自分（周恩来）のところに報告せよということだつた。さらに推測すれば、董健吾に顧順章の行動を逐一、漢口の知人を通じて国民党の警察に伝えさせ、顧順章を逮捕させるよう仕向けることだつた。周恩来は、董健吾に国民党の上層部と通じる知人がいることを知つていて、顧順章の漢口行の同行に指名した。しかし、これらの周恩来の意図を董健吾にどれだけ率直に伝えていたのか、あるいは周恩来の真意を董健吾がどれだけ理解していたか、真相は明らかでないが、後述するように、事件後の党中央の董健吾に対する対応から見れば、董健吾は巧妙に周恩来に利用されたと考える方が事実に近いように思われる。

またこうも推察することができる。顧順章の特科からの追放を謀つた周恩来や作戦を実行した聶榮臻らの「実行グループ」は、その作戦を秘密に遂行するために、董健吾に別の作戦を命じて注意を逸らせようとしたのである。このように考えなければ、なぜ董健吾が顧順章に同行したのか、周恩来がわざわざ董健吾をこっそり訪ねて任務を伝えたのか、明白な理由が分からないのである。

それにしても、何故、董健吾が選ばれたのであろうか。世間での董健吾の身分はセントジョーンズ教会の牧師で、大同幼稚園の園長であつたが、裏の党の工作では、中央特科の顧順章のあと、陳賡が指揮した行動隊（打狗隊）の積極的分子として残酷なテロ活動も行った。しかし、特科の積極分子であつたというだけで、周恩来が董健吾を漢口に派遣したのではなかつた。むしろ理由はその逆で、周恩来は、前述したように董健吾には漢口に国民党当局と通じる人脈があり、顧順章を売り渡す手軽な手段となり得ると判断したからであろう。鄭先海の『脱險記』は董健吾

の本来の任務、すなわち顧順章を国民党当局に売り渡すこと、あるいは顧順章が敵（国民党当局）に投降するのを見とどける任務を別の話題に眼をそらせて真相を覆い隠すために書かれた「創作」であったのではなからうか。

では、鄭先海は『脱險記』に董健吾がいったいどんな危険な目に遭ったと述べているのであろうか。いよいよ『脱險記』に描かれた董健吾の秘密行動を検証して見ることにするが、その前に、董健吾とはいったいどのような人物かを董霞飛、董雲飛の『神秘的紅色牧師董健吾』をもとにして振り返っておこう。

董健吾の行跡が一躍脚光を浴びることになったのは、アメリカのジャーナリストが毛沢東にある要望をしたことが契機となった。その経緯はこうである。一九六〇年六月、エドガー・スノー Snow Edgar Parks (1906～1972) は二十年ぶりに新生中国を訪問し、毛沢東に、十月一日の天安門での国慶節式典に招待され、式典が終わったあと、二人はまるで久しぶりに出会った旧友のように思い出話に花を咲かせた。この時、スノーは毛沢東にちよつとした要望を出した。

「もう一度、あの『王牧師』に会いたい」

毛沢東はこのスノーの依頼に困惑した。スノーとの会話を通訳した『王牧師』が長征に出発するまえに、上海に残した三人の子ども岸英、岸青、岸龍を養育してくれたセントジョーンズ教会の牧師で、幼稚園園長董健吾であったとは気づきもしなかった。毛沢東はただちに周恩来に『王牧師』の所在を探させた。その周恩来もかつて顧順章を追放するために武漢に派遣した董健吾が『王牧師』だとはすっかり忘れていた。周恩来は中国赤十字社党組織書記の浦化人を通じて董健吾の正体を突き止めたが、すでに党との関係を断っていた彼の行方はいぜん不明であった。

スノーはこの時、念願の再会を果たすことはできなかったが、どうし

ても背が高く温和人柄で、流暢な英語を話すあの牧師を忘れることができなかった。一九六四年十月、スノーは再度の中国訪問を果たした。前回の失態以来、党中央の関係者は董健吾に対して関心を向けていた。しかし、当時の董健吾をとりまく境遇は悲惨な状況にあった。三六年、延安でスノーと別れたあと、董健吾は「上海に帰ったが、状況の突変によって単線連絡の潘漢年が香港に去り、地下党とのつながりを失った。その後、種種の原因によって彼と党の関係はふたたび繋がることはなく、彼は糸の切れた凧のようにあちらこちらを漂泊し、艱難辛苦をなめ尽くした」。六一年の二月、上海で推拿業^{マッサージ}を営んでいた董健吾のもとに突如、国防部弁公庁から連絡があり、夜に錦江飯店前の小楼まで来て欲しいという要請であった。潘漢年事件に連座して逮捕され、一年余り上海市の看守所に拘禁され、二年のちに『無罪釈放』の宣告を受けて自由の身になったが、拘禁の間、四子の董寿祺は父の容疑に連座して家産を没収されて、当時、地下党が使っていた無線通信機の部品を押収され、敵の特務の嫌疑で隔離審査を受け、董一家は生活にも困窮する悲惨な境遇に陥っていた。

「今度はどんな運命が待ち受けているのだろうか」

董健吾はどきどきしながら豪華な大ホールにただ一人で立ちすくんでいた。とつぜん、正面玄関のドアが開いて大将の階級章をつけた軍人がつかつかと歩み寄ってきた。董健吾は一目見て陳賡だと分かった。陳賡は、ときに中央軍事委員と国防部副部長に任じていたが、顧順章が追放されたあと、特科の責任者になり、周恩来の片腕として特務工作を牛耳っていた^①。陳賡は董健吾が牧師であるのに目を付け、特務工作に利用できると考えて特科に引き入れ、手始めに周恩来の軍委の部下であった白鑫の叛変事件を処理させた。これは董健吾の共産党に対する忠誠を試す任務であった。陳賡が特科に引き入れた人物にさらに楊度がいる。楊度も

巧妙な手段で共産党に引き入れられ、すぐに革命根拠地に派遣されて党への忠誠心を試された。

話はすこし先走るが、董健吾が顧順章の監視を命じられて武漢に派遣されたのも陳賡の指図によるものである。陳賡は相手の経歴を見て、それを引き合いに出して巧みに利用した。周恩来に重宝がられた人物に顧順章、潘漢年がいた。二人とも陳賡をはさんで特科の責任者となった。しかし人生の後半には党組織から見放されて不遇をかこった。董健吾もその一人だった。顧順章事件で国民党の情報機関に潜り込み、顧順章の叛変を即座に周恩来に伝えた錢壯飛もじつは体よく利用された一人であった。ところがその反面、周恩来の部下の中でも、晩年に至っても中央の要職に就いて優遇され、あるいは中央軍委の上層部において政治人生を全うした人がいた。ひと口で言えば、彼らは軍人出身であり、中央軍委で周恩来の直属の部下たちである。

軍人やその出身者だけを信頼し、彼らを優遇する周恩来の意向はさきに取り上げた白鑫事件に如実に見られた。白鑫は黄埔軍官学校以来の周恩来の子飼いの部下で、事件当時は中央軍委秘書であり、中央軍委書記周恩来の側近であった。その白鑫が国民党に寝返り、中央政治局委員、中央農委書記、中央軍事部部長、中央軍委委員で、江蘇省委軍事委を兼ねていた澎湃、楊殷、顏昌頤、邢士貞の四人を国民党当局に売り渡し、四人は即座に処刑された。だが、この事件は周恩来の身近な内部で発生した個人的な反逆であり、周恩来の権威をひどく損ねた。周恩来は権威回復のために復讐を企てた。党中央の機関誌《紅旗日報》に「澎湃顏邢四同志の敵に捕らえられ殺された経過」を書いて私憤を党中央の危機に転嫁した。陳賡は顧順章ら五人の特科行動隊を率い、白鑫の隠れ屋を襲撃して見事に討ち取った。董健吾ははじめて特科のテロ工作に加わり、陳賡、周恩来の信用を取り得たが、周恩来の個人的な復讐劇に利用され

ただけだった。

すでに述べたように、顧順章の肅清を実行したのは、周恩来の政治地位を擁立していたこの軍委を中心とした軍人グループであった。周恩来は肅清計画をはやくから立てていた。真っ先に軍委参謀長の聶榮臻を特科に呼び寄せて計画をたて、四中全会後に、特科の責任者になった陳賡が具体的な計画を練った。実行グループのリーダー聶榮臻のもとに李克農、李強、陳養山、劉鼎、柯麟、王陽新らが召集され、誰が何処でどのような任務を担当するかを決めて上海に待機した。

周恩来は一方で陳賡の提言を受けて、南京の国民党の心臓部に党員を潜入させることにし、李克農、錢壯飛、胡底を送り込んだ。錢壯飛は首尾よく国民党中央委員会組織部調査科科长、徐恩曾の機密秘書になりました。錢壯飛は、顧順章が逮捕されて国民党に寝返ったことをいち早く党中央に知らせたことで、党中央の危機を救った人物として英雄視される。

だが、党の危機を救ったと称賛された董健吾、錢壯飛はともに軍人出身者ではなかった。顧順章の追放に周恩来から重要な任務を命じられるが、しかし任務を達成した功績の大きさに反して、彼らの党から受けた処遇はすでに述べたように冷遇というほかなかった。四中全会後、中央特科の工作を実質的に牛耳っていたのは陳賡であったことから見れば、董健吾、錢壯飛の特務工作の任務は周恩来、陳賡が指令したものであり、とうぜんその内容を承知していたはずであった。

ところが、膨大な量でまとめられた陳賡の伝記、『陳賡伝』（当代中国出版社 2003年）にはこのあたりのことはほとんど取りあげられていない。特務工作のことだからとうぜん隠蔽されても不思議ではないが、まったく記載されず、秘密里にされたことは、反って明らかにできない事実が隠されていることを物語っている。顧順章、潘漢年を含めて董健吾、

錢壯飛の晩年の境遇がどのようなものであったかについては、党の彼らに対する処遇の本意がよく分かるので、後章においても一度取り上げることにした。

話を本題にもどして、董健吾が何故、顧順章の監視の任務に命じられたのかは、その出身と経歴に大きな理由があった。さきに述べたように、スノーのたつての願いに対応した党中央の処置にもそれがよく表れていた。

文化大革命が勃発する二年前、スノーは三度目の、中国訪問を果たした。今回は、関係当局が上海で董健吾に会えるように手配してくれていた。スノーは浮き浮きした気持ちで上海に向かった時、とつぜん、中央弁公庁から、毛沢東が会いたいのですぐに北京に来るようにという知らせを受けた。あれほど望んでいた董健吾との再会を間際で中止させて北京に呼び寄せた毛沢東の急用とは何であったか興味あるが、毛沢東はスノーを董健吾に会わせまいとしたのかも知れない。董健吾は潘漢年事件に連座して逮捕され、国民党との関係の嫌疑をかけられた。毛沢東は党中央から外れた特務行動にことさら不信を懐いた。

とはいえ、一九六〇年代の初めは、中国の社会主義社会の建設において国内外に極めて困難な状況に陥っていた時期である。毛沢東は大躍進政策の失敗で国家主席を辞職し（五九年九月）、党北京市委を中心にする反毛沢東路線の推進の矢面に立たされていた（六一年）。国際的には六二年十月にキューバ危機が発生し、ソ連との対立が鮮明化した（中ソ対立）。

毛沢東にとつては、スノーの来華の目的は董健吾との再会などの些細なことではなかったはずであった。しかし、文化大革命で毛沢東が資本主義の復活を目論んでいると見なして打倒したのは、国民党と共産党の間を行き来する董健吾のような「小資産階級」であった。だからこの時、毛沢東の脳裏に董健吾の存在が一片もなかったとは言えなかった。現に

「文革中、董健吾は、批闘（公開の非難）、抄家（財産の没収）、特務、逃亡地主」などのありもしない罪名を無理やり着せられて、批闘、抄家と隔離審査（身柄を拘束されて審査されること）を受けた。病気で入院中、大字報（批判や自己批判のための壁新聞）が病床の前に貼られ、医者に掛かって投薬の制限を受けた」のであった¹²。

董健吾の行跡が生涯を通じて脚光を浴び、あるいは批判の対象にされたのは牧師という身分が要因となっていることはさきに指摘した。彼の足跡をたどってみよう。

董健吾は一八九一年、江蘇省の古い町、青浦県東門棣橋の名門の家に生まれた。青浦県は、いまは上海市に属するが、古来より河港が入り組み、湖沼が密集する、県全体が水源に豊富で、肥沃な土地に恵まれ、民風は勤僕で、物産が豊富な土地柄として、四方に名の聞こえた魚米の郷であった。その県城の東門外に董家の大院があった。

祖父は幾つかの地方で県知事になったことがあったが、董家が繁栄したのは祖母の沈氏の力が大きかった。沈氏の実家は代々の書香の家柄で、彼女も学問に通じ、道理をわきまえ、思想は開明的であった。実家には弟の上海教育界で有名な、上海の名門校——南洋模範中学の創設者、初代の校長となった沈書揆がいた。祖母はなかなかのやり手で、董家の財産を管理したほか、沙船の事業を興して財を築いた。沙船というのは雇船（契約した船）で砂や石などの建築材料を運送する商売であった。この事業は、世間の目からは女性が立ち入るような世界ではなく、女性には危険な仕事だと思われていた。しかし、彼女は人の処し方と使い方が上手かったので、使用人たちはみんな心服し、たちまち事業は成功した。祖母は財を蓄積すると、田地を買い、家屋を建造し、糧食を貯蔵し、銀錢を儲蔵した。祖母はなお夫のために官職を買った。董健吾が幼少の時、董大家族は実質上、祖母の沈氏が中心となっていた。祖父が死ぬと、

祖母はますます家庭内外に手腕を発揮した。

祖母が当地で大きな存在になったのは、彼女が敬虔なキリスト教の信者で、教会の布教活動に物心両面から援助したことも理由に挙げられる。まだ清朝の光緒年間の頃、清浦にも西洋から宣教師がやってきてキリスト教の布教が始まった。しかし、人や土地に不慣れであった宣教師は住む場所さえ探し出せなかった。彼らは当地の富豪で、ずっと前から敬虔な信者であった董家の女主人の存在を知ると、支援を申し出た。祖母は宣教師といっしょにやってきた若い女宣教師にとくに好感を懷いた。後にみんなから「鮑小姐」（ボーさん）と呼ばれて人気者になった女宣教師は、色白の美人であっただけでなく、簡単な中国語を話し、身のこなしは優雅で、言葉はゆつたりとして上品であった。娘のいなかった祖母はさつそくボー宣教師に屋敷内の部屋を提供して住ませ、家族の一員のように扱った。董健吾が英語に通じ、教会の聖職者に係わるようになったのは祖母とボー小姐がきっかけであった。祖母には子どもがなかった。膝下には先夫が残した董守志、すなわち董健吾の父しかいなかった。父は蔡氏と結婚し、二人の子どもが生まれたが、長子は結婚したあと、一人の子どもを遺して死んでしまった。あとに残された次子が董健吾である。ただひとり董家に遺された董健吾は祖母に溺愛された。小さい頃から聡明な子であったから、祖母は董家の運命を托しただけでなく、董健吾に広い視野を持った人物になるよう望んだ。彼にも篤い信仰心を持ち、西洋文化を学び、高等学府へ進学できるようにボー小姐に家庭教師を依頼したのであった。

ボー小姐が董家の大院を去るとき、蘇州にある教会が設立した桃塢中学に進学するよう薦めた。在校中、イギリス人の先生は英語に巧みな董健吾に、田舎からできた少年がどうしてこんなに英語が上手なのかと驚き、上海のセント・ジョーンズ大学の付属中学校で勉強するよう推薦し

た。これらの経歴は董健吾とセント・ジョーンズ大学の「不解の縁」を結ばせることになった。

一九〇八年、董健吾は上海セント・ジョーンズ大学高中部に入学し、三年後、一九一一年に念願のセント・ジョーンズ大学の数理学部に進学した。祖母はこの時も孫のために高額な学費を捻出して送った。祖母が董健吾の人生路を決定したとも言える。大学卒業後、牧師の資格を取得するために神学院専修に進んだのも祖母の強い後押しがあったからである。董健吾がこれから歩む人生の道筋や人脈は祖母が事業の中で築き上げた理想の人生構図であった。セント・ジョーンズ大学の学生は本来、裕福な家庭の子弟が多かったので、後に政治家や官僚、実業家、宗教家になった同級生がいた。そこから董健吾には多方面の人脈が生まれた。董健吾の社会的な行動はおのずと宗教関係を基盤とし、政治行動は政府、国民党関係の人脈が基盤となった。これらの人脈の根源はセント・ジョーンズ大学にあった。

このように董家の各界の有力者と人間関係を築いていくという処世術は、何も祖母の独創ではなかった。浙江財閥を築いた宋嘉樹 Charles Jones Soong (1866 - 1918) が自分の子ども（宋子文と三姉妹）の娘に異なる分野へ嫁がせて、時代の変化に対応したのは商人の巧みな生き方であった。董健吾の祖母もこの地方のごく一般的な商人の処世術を発揮したのである。

一九一七年、神学院を終えると、校長ポット Pott、Francis Lister Hawks (1864 - 1930) の手配で揚州、西安の中小学校の教員になり、さらに聖公会（英国国教会）が設立した西安中学の校長に就任した。校長のポットは董健吾を後継者に育てようと思ひ、まず実践をさせて箔をつけ、そのあとで晴れて大学に帰って要職に就かせることにした。董健吾は校長の期待に背かず、「とりわけ西安での教学は法にならっており、伝道は

力を尽くし、上下は一つになり、左右は通じ合っていて、多くの地方の顯官貴人や外国人と知り合いになった」。その中の一人に、世間でよく名の知れたスチュアート John Leighton Stuart (1876 - 1962) がいた。『近代来華外国人名辞典』(中国社会科学出版社)によれば、スチュアートは中国生まれのアメリカ人で、母国の大学を出たあと、中国に帰ってきて金陵神学院でギリシャ語の教授に就任し、十八年、燕京大学を設立した後、校長になり、二十九年、改めて校務長に就任する。第二次世界大戦が始まると、一時、日本軍に拘留されるが、日本の敗戦後、復職し、四十六年、米國駐華大使になり、国民党を積極的に支持した。四十九年に帰国している。董霞飛・董雲飛は、毛沢東が《別了、司徒雷登》という有名な文章の中で非難したのが、あの蒋介石を支持し、共産党に反対した駐華大使であったと紹介している¹⁸。

スチュアートと董健吾の關係は西安での人脈をよく表していた。董霞飛・董雲飛は父の評伝を書くにあたって党と現実との間に齟齬があるのに苦慮した。彼らが知っていた現実はこうである。

一九二〇年のある日、スチュアートが西安中学校に董健吾を訪ねてきた。二人は初対面なのに、会うなりたちまち英語と中国語が入り交じる歓談となった。スチュアートは本題に入り、董健吾にこう打ち明けた。

「聞くところでは、先生は陝西督軍の陳樹藩と莫逆の交があるとのことですが、先生が督軍と相談して、督軍が京城に買った勺園を譲り受けることができるかどうか聞いてもらいたいと思っています」

「スチュアート先生は勺園を購入してどうするのですか?」

「じつは、燕大と勺園を連ねて拡張し、アメリカのハーバード、イギリスのオックスフォード、ケンブリッジに追いつきたいと思っています」

董健吾はスチュアートの意図をはっきり知ると、勺園の売買の仲介をするのは、必ずしも悪いことではないと思った。

だが、勺園の譲渡問題はこれでスムーズにことが運んだ訳ではなかった。董健吾は誠意を持って陳樹藩に交渉したが、陳は、勺園は祖父の老後の保養のために購入したものだから売却はできないと断った。その後、いつも夜になると、友人(水利専門家の李宜)の父、李同契が創設した易俗社に出かけて秦腔(戯曲の名、陝西省で起こったのでこの名がある)を聞き、この場で陳樹藩の父と知り合い、三人は「忘年の交」(年齢の違いを超えた交際)を結ぶ友人となった。またこのあと、董健吾は勺園の件を持ち出し、陳の父から北京は遠いので住むことはないという返事を得た。まもなく、スチュアートを伴って督軍署に駆けつけ、二人が直接交渉を進めた。この会談には李同契と成徳中学校長の董雨陸も同席し、互いに儀礼を交わして、まるで外交交渉の会談のようだった。ところが、陳樹藩は、勺園を購入したのは家父の保養のためで、譲る気はなく、利を貪る意図もないと意外な言葉を口にした。これを聞いたスチュアートは頭に一撃を食らったように呆然とし、人を虚仮にしたのかと董健吾に怒りを向けると、話しをよく聞けと陳督軍の方に手招いた。

「私は家父の厚望に遵って勺園を燕大に売らないが、燕大に贈与したい……」

こうして、スチュアートは董健吾の援助で一文も使うことなく、僅かの力を費やすことなく、広大で美しい勺園を取得した。燕大は発展していまの北京大学になる。

一九二四年の秋、董健吾はセント・ジョーンズ大学校長ポットに呼び戻されて、校長補佐兼大学と付属中学の教員、看理員に就任した。董健吾にとつて母校の経営陣に加わったことは榮譽なことであったが、これが彼に重大な決断を迫ることになった。二五年二月と四月に上海と青島で起こった労働者のストライキは過激な反帝運動に発展した。五月三十日、中共中央に指導された上海の労働者、学生のデモ隊が南京路老開捕

房の前を通りかかった時、イギリス巡捕がとつぜん発砲し、労働者、学生に十数人の死者と負傷者を多く出した。後に「五卅惨案」といわれたこの事件は、上海市民だけでなく全国の人びとにも憤激の声が広がり、六月一日から大小の都市でも「三罷」（労働者、学生、商人のストライキ）の騒動が起きた。

イギリス国教会が創設したセント・ジョーンズ大学では、この「反帝」運動のあおりで校内に深刻な対立が生まれた。運動に同調する一部の教師・生徒は罷教、罷課（教師と学生のストライキ）を開始し、参加者がますます増えていつて、大学も反帝の洪水に巻き込まれた。ポットは教師、生徒が政治に係わるのに反対で、もちろん教師、生徒のストライキには大反対であった。ポットは休暇を繰り上げて生徒を学校から追い出すことにした。校長補佐で、教師であった董健吾はとうぜん校長に賛同する立場にあったが、構内に設けられた「五卅」に殉じた烈士の霊堂を撤去した校長の行動を見て、にわか「民族の恨み」を呼び起こされた。

「西洋人の籬まがきの下に身を寄せて、民族の權益に背くか、それとも国人の生気を揚げ、個人の私利を棄て、一人の生々堂々の中国人になるのか」

董霞飛・董雲飛はこの時の父董健吾の心境を党の用語を使って次のように書いた。「激烈な思想闘争を経て、ついに後者を選択し、毅然として多数の師生の側に立って、反帝闘争の行列の中に参加した」^⑬。激烈な思想闘争がどのような董健吾の思想的な苦悩であったのか、いつもの共産党の慣用句なので分からないが、ここで決断したのは信仰を棄てることではなく、教会との関係を絶つというのではなかった。西洋人の校長と縁を切っただけであった。

早々に大学を引き揚げた董健吾は一時、セント・ジョーンズ教会の牧師になったあと、故郷、青浦の同級生で、当時南京政府教育部秘書の戴志騫から県立中学の校長に就任するよう要請された。董健吾は快諾し、

県立学校の校長になるには国民党員でなければならぬという規定によって国民党に加入した。一方、青浦では多くの顔役らと知り合いになり、その中の多くは共産党員であった。高爾松は青浦の早くからの中共党員で、青浦県県長になったことがあった。弟の高爾柏も共産党員で、この時、江蘇省国民党党部委員、宣伝部長、秘書長に任じていた。さらに青浦県代理県長に任じ、国民党青浦県党部執行委員などに任じた姚湘濤がいた。二十七年三月、上海で三回目の労働者武装蜂起が勝利し、北伐軍が上海を占領すると、青浦でも城内のあちこちに青天白日旗が懸けられ、その日に新しい県政府が生まれ、高爾松が青浦県県長に選ばれる。ところが、四月十二日、蒋介石が「四・一二政変」（共産党は反革命クーデターといった）を發動すると、上海からわずか数十里の青浦にも政変（清党）の波が押し寄せ、県党部委員高爾松ら七人が上海警備司令部に告発された。

北伐軍に加わり、時に上海にいた李公僕はこの情報を知ると、すぐに董健吾を訪ねて相談した。李公僕の調停をへて、上海警備司令陳群は董健吾を国民党青浦県党部清党委员会主任委員にゆだねた。董健吾はただちに国民党県党部を接収し、新県長の顧莞生と協同で清党の件を処理した。董健吾は個別に逮捕することは先回りして手を打たれ、捜査の情報が漏えいする恐れがあるので、一網打尽にする「鴻門の宴の計」を採用しようとして提案した。

周蕙は、この提案は高爾松らを救出するための董健吾の秘かな策略だったという。事は簡単に進まなかったが、事前に知らされた高爾松ら七人の共産党員はすばやく逃走して難を免れた。あとに残った董健吾は極秘の逮捕計画を漏らしたのではないかと疑われ、早々に青浦県中学校校長の職を辞任して、家族とともに上海のセント・ジョーンズ教会に帰った。

振り返ってみると、これまでの董健吾が残した足跡は、つねに人に依頼された問題に、懸命に対処する誠実な姿であった。だが、そこには自らの積極的な信念に基づく行動は何ひとつなかったと言つてよい。二十八年八月、董健吾は浦化人と張景曾が紹介者となって共産党に参加した。しかし、この経緯も何故、入党したのかの理由は必ずしも明確でなかった。

二十七年六月、家族といっしょに上海に戻ってきたが、清党運動の白色テロの渦中で董健吾は何のなす術もなかった。そんな時のある日、セント・ジョーンズ大学の同級生で、すでに中共地下黨員であった浦化人が訪ねてきて、董健吾に国民革命軍の鄭州馮玉祥軍の従軍牧師にならないかと誘われた。この時も董健吾は熟慮せず即座に快諾し、教会に一年の長期休暇を請い、浦化人に随つて鄭州に赴いた。馮玉祥と李徳全夫人自ら董健吾を出迎え、二人はすぐさま意気投合した。馮玉祥はただちに董を国民革命軍第二集団従軍牧師に招き、繼いで政治部秘書処処長に委任した（党史作家の周憲は、国民革命軍第二集団軍司令部宣伝秘書長に就任したとする）。¹⁶ 公的な職務だけでなく、馮玉祥と夫人および子女の英語教師を担当し、彼らから様ざまな情報を聴き得た。その後さらに、洛陽工人事業管理処処長なるよう頼まれ、洛陽に住むことになった。洛陽工人事業管理処の仕事は隴海線沿線の十余の県鉄道労働者の福利事業であった。ここで鉄道労働者の労働、生活、衛生環境の深刻な情況を知り、馮玉祥に改善を提言して労働者の信頼を得た。

董霞飛・董雲飛は、当時、父が如何に人民の立場に立っていたかを物語るものとして、馮玉祥に《軍隊の到る所の処は必ず地方の党務と民衆の団体を幫助すべきことに関する電令》を打つて許可を求めたという。

「軍隊は須からく民衆と結合すべきで、すべての民を保ち、民を愛し、民衆を援助するなどの工作は、つとめて切実に実行して、軍隊を民衆の

武力と成し、民衆と軍隊がおのずと一体と成るようにしなければならぬ。……賃金が低い労働者は、つとめて何とかして賃金の増加に努力し、必ず当地の生活情形に照らして、四人を贍養できる費用を基準とすべき規則を制定し、力に応じて労働者の賃金を増やし、医療基金を提供し、一步一步労働者の生活を改善し、鉄道労働者に安心して労働せしめ、いっそう軍隊のために物資を運送できるようにする」

しかし、董健吾のこのような「慈善的性質の工作」は現場の有力者に反感を懐かれた。二十八年七月のこと、張某という鉄道掃除人夫が公道まで采配したので洛陽県長霍濟華と衝突を起こした。事は大騒ぎになって馮玉祥に伝わった。馮玉祥は霍濟華の民に及ぼした災い、過去の悪行を調査したあと、霍濟華を極刑に処すよう命じた。事後、世間では霍濟華は董健吾に陥れられたのだという噂が飛び交い、霍濟華はときに権勢日に盛んで、重兵を掌握していた西北軍将領の韓復榘の親戚であったので、韓復榘は董健吾に必ず報復すると公言した。難を避けるために、董健吾は鄭州に帰り、馮玉祥に保護してもらった。

馮玉祥の鄭州部隊にも清党がはじまると、董健吾は共産黨員であるという評判が立ち、董健吾も清党のブラックリストに入れられた。董健吾が浦化人と張景曾の紹介で中共党に入るのにはすでに述べたように八月のことだった。その入党の動機は董健吾の行動パターンによく見られた受動的な態度であった。

「共産党でないのに、彼らは何故、私を『粛清』しようとするのだ？ほんとうにこんな道理があるものか！私が共産党であるなら、それならそれでよい」

共産党にこのような態度を懐いているのを知られ、浦化人は喜んで、董を入党させようと決心し、じつは共産黨員であると告白した。そのあと、河南省委書記張景曾に紹介した。清党の風声はいよいよ緊迫し、九

月末、浦化人は鄭州を逃れたが、党員の身分がばれなかった董健吾はそのまま馮玉祥の軍に留まった。南京政府は馮玉祥の軍隊の統制を強化するために郭春濤を派遣して、司令部政治部部长に任命した。郭は董健吾を孤立させて、逮捕の手を伸ばした。馮玉祥は董健吾の安全のために早く鄭州を離れるよう勧告し、饒別の宴会を設けた。馮玉祥は董健吾の人となりを語って、「君は不思議な牧師だ」と述べ、董健吾の「進歩的思想と親共傾向」に怪訝な表情を浮かべた。

董健吾の身に危険が迫ったのは馮玉祥が当局に伝えたからだという説がある。

董霞飛・董雲飛の伝記によれば、董健吾が馮玉祥に従って盛大に革命をやっていたときに、とつぜん馮もまた部隊で清党をやりたいと言っているのを聞いた。董健吾は困惑した。馮玉祥はソ連行つて革命の経験を考察し、軍を治める秘訣を学んだのではないか？ 工農大衆と兵士の疾苦に関心があったのではないか？ 彼がやろうとしたことは中共がやるうとしたこととびつたり合っていたのではないか？ それなのに、崇拜する馮玉祥はどうして反共をしようとするのか？ 董健吾はこの疑念を浦化人に質してみた。浦化人の説明は董健吾に入党を勧誘する巧みな甘言であった。浦化人は次のように馮玉祥の政治姿勢の本質を指摘した。

馮玉祥は中山先生（孫文）の聯ソ・容共の建國方略に賛同したのではない。彼がソ連で学んだ治軍、治国は、ただ、そっくりそのまま葫蘆を描いただけであつて、実質的なものを学んだのではない。彼は蒋介石と結拜した兄弟の情は断ち切れなかった。彼は蒋介石と携手して、政権を労働者農民の指導に任せることはできなかった。中山先生が説いた民衆を喚起することは、すなわち労働者階級が指導する新政権を建設しようとするものであり、古い機器をひっくり返し、古い鎖錠を叩き壊そうとするものである。

浦化人の説明に、董健吾は「兄の言には道理があるが、愚弟には馮將軍に納得するところがあり、馮將軍がこのような行事をするのを咎めることはできない」と馮玉祥への信頼を固持する。しかし、浦化人の次の言葉は董健吾の心境を動揺させた。

「清党と言えば、軍の中に、あなたは「紅牧師」であり、中共が派遣したものだ」と取り沙汰する人がいる」

董健吾が共産党に入る決断をしたのは、結局は浦化人の勧誘によるものであったが、しかしそれは上記のように積極的な意志にもとづくものではなかった。

一九二八年十一月、董健吾は秘かに上海に帰ると、もとのようにセント・ジョーンズ教会の牧師となった。ほどなく、中共の上海地下党組織は互済会の責任者王弼に董と連絡を取らせた。董健吾は互済会の工作に参加し、かつこの工作の中で潘漢年、李維漢らの地下党の活動家を知る。周蕙によれば、互済会における董健吾の主な任務は、牧師の身分で獄中に行つて布教する機会を借りて、逮捕された中共黨員と獄外の党組織や家族の連絡を取ることであった。だが、董健吾の任務が中共黨員の救済であつたとしても、それは中共黨員としての忠誠心から湧き出たものではなかった。

互済会は中共が発起した大衆的な慈善団体で、二十五年に中国済難会として発足して以来、各界の著名人が事業に参加していた。二十七年の「四・一二政変」後、いきおい中共の下部組織に変わり、二十九年の末、中国互済会に改められると、中共特科はさかんに利用できる著名な人物を送り込んだ。この頃、中国互済会に参加した人物に前述の楊度がいる。楊度は潘漢年に誘われて会員となり、後に周恩来、陳賡の紹介で中共の秘密黨員になった。楊度もそうであったが、董健吾の周りには多彩な人脈があつた。セント・ジョーンズ大学の同級生には国民党の指導者にな

る宋子文や顧維鈞がいたし、この時、上海の幫会とも密接な関係があった。おそらく祖母の事業との関係からであろうが、董健吾は上海の青幫に加わった。組織では「同」字の輩クラスのかなり高い地位にあり、上は蒋介石、杜月笙から下は一般の会員までことごとく交友関係があった。青幫との関係から上海警察局、租界巡捕房にも友人がいた。董健吾は教会の牧師としての名声も高かった。各界の名士の家庭にも請われて説教に赴いた。宋子文の母親にも祈祷に同伴し、多くの上層階層の人と知り合うことになった。

董霞飛、董雲飛によれば、蒋介石の「四・一二政変」のあと、宋子文が董健吾を訪ねてきて、同級生と友達の誼で、国民党に追随しようと勧めたという。友人と交際が上手く、広範な社会関係を持つ董健吾は、中共の特務工作にとつてきわめて貴重な人材であった。陳賡は巧妙に特科に取り込み、教会を党の拠点に利用して、周恩来は中共の組織を挽回しようとした。

さて、鄭先海の『脱険記』は、董健吾が漢口でどんな危険な目に遭ったというのであろうか。ここで、董健吾の漢口での行動を追跡して、その目的は何であったのかを考察してみる。ところで、鄭先海の『脱険記』はどのような種類の記録なのであろうか。披見するところでは、雑誌『縦横』編集部編の『隠蔽戦線大写真』（中国文史出版社2001・1）という実録もの、「隠蔽戦線大写真」とは情報工作の真実像という意味で、非共產党系の出版社が出した一般向けの読み物に掲載された（以下大写真版）とする。このあと、同名の文書が「武漢文史資料」（武漢文史出版社2005・3）に掲載された（以下「文史資料版」とする）。しかし、両者の間には大幅の出入があり、「文史資料版」にはかなり改竄したあとが見られる¹⁸。ただ、「大写真版」は一冊の本に掲載するために字数を削減したとも考えられるので、どちらがもとの原文であるかは判断できない。時間的に見ると、

「大写真版」のほうがはやく刊行されているが、これよりはやく刊行されている周蕙「董健吾」（2000・12）にもかなり整理された董健吾の「漢口脱険」からの叙述があるので、「大写真版」が原作であるとは断定できない。

とはいえ、漢口での董健吾の足取りを逐一知っている人はそんなに多くいた訳ではない。顧順章と助手の張增謙（張崧生）を除くと、董健吾本人、また董健吾が漢口にやってきた目的をすべて語っていたら、同級生の劉少岩も知っていたに違いない。さらに王光遠が述べたように、周恩来の命令で顧順章、董健吾ら六人が漢口に赴いたが、その内の何某かは顧順章、董健吾の監視を密命されていたかも知れない。何某かは監視した一部始終の報告を鄭先海が「脱険記」というドキュメンタリーに仕立てたとも推測できる。鄭先海に材料を提供したのは案外、董健吾の自伝であったとも考えられる。周蕙は、鄭先海の『脱険記』の記述をすべて信用した訳ではなかったが、漢口到着から「脱出」までの描写はほぼ鄭先海にしたがっているのである。

それにしても、鄭先海が何にもとづいて、またどういう目的で『脱険記』を書いたのかは前述のように漠然として明らかでない。じつさい、これらの問題は顧順章の漢口での行動を知るうえで重要な証言になるのだが、後述するように、文章の内容に矛盾があり、事実関係も符合しないところがあつて創作としかいいようのない文章である。

さて、『脱険記』には、冒頭に要旨のような前文句があつて、董健吾の人生のトピックスを挙げている。すなわち董健吾は一九三六年にスノーを伴って紅軍の大本営に入り、毛沢東に引き合わせた。一九六〇年九月、スノーは毛沢東の客人として国慶節式典に参加したあと、董健吾に再会したいと希望した。毛沢東ははじめて当時の通訳をした人が董健吾であることを知った。このような董健吾の一生の中で、上海で陳賡と叛徒白

鑫を取り除いたこと、毛岸英ら三兄弟の面倒を見たこと、西安で張学良將軍と共産党の合作の労をとったこと、そして一九三一年四月、武漢で叛徒顧順章の眼下から脱險したことは、董健吾の坎坷の経歴の中の奇絶このうえなきはらしい一章であると述べて、漢口からの脱出劇の真相を語るというのであった。

鄭先海は冒頭に、スノーのことを「已すでに故なった米国の著名な新聞記者」と紹介した（「大写真版」）。スノーは一九七二年に没している。すると、『脱險記』の「大写真版」は七十二年以後に書かれたことになり、少なくとも現場からの報告の記録でないことが分かる。このことは上海を発つ顧順章の一行の出で立ちや様子からも判明できる。

すでに述べたことであるが、鄭先海によれば、董健吾は三月三十日の夕方、軽装の旅芸人に扮した顧順章の一行に随って上海を出発した。その時、董健吾は黒色の大掛チヤンセンを着て、背が高く、角刈りの頭をして、両手に魔術道具を入れた藤箱を掲げ、眉間には伶俐な眼光がきらめいていた。彼らは夜陰に乗じて、イギリス船で漢口に出発した。

鄭先海は、一行のリーダーの顧順章を中背の、鼻の高い、肥った身体の人物で、その両眼にはもとから持っていた詭秘ひみつめいた光を現していたと狡猾な悪人に仕立て、背が高くて温和な、それでいて機知に富んだ董健吾との対照的な構図を作った。しかし、二人の実像はまったく異なっていた。顧順章は前章でハン・スーインが表現したように、背が高く、「スマートでハンサムな」容姿をしていた。顧順章は決して不可解な、秘密めいた性格の持ち主ではなかったのである。他方、董健吾は、三十年代の写真を見ると、黒枠の丸眼鏡をかけ、短い髪形のけつして穏やかでない精悍な顔つきをしている。鄭先海が描いた董健吾はおそらく晩年の容姿であろう。（写真①、②）

このような二人の人物像を前提として、鄭先海は顧順章の眼下まじかの危険

から脱出した「ドキュメントリー」を書いた。では、どんな危険な状況に陥ったのであろうか。鄭先海の話を聞いてみよう。

「四月三日、顧順章一行は漢口に到着し、四日の午後六時に張国濤、陳昌浩を受け入れて日本租界にある秘密の連絡拠点に住ませた。七日、（顧順章は—文史資料版の補足、以下同じ）張、陳ら（二人）を鄂豫皖ソ区から護送に遣つて来た連絡員に托す（引き渡す）と、顧順章は（董に）

漢口で数日のんびりしたいと要求（意見）を出した。董健吾は顧と話合つて、まだ信頼できる社会関係がちゃんと決まらない間、董健吾はしばらく同学で、当時暨済水利電力会社の経理であった劉少岩の家に住み、顧は（特科の張増謙と）漢口怡園近くの世界旅館（世界大旅社）に宿泊すると言ひ、また濱江一角で会う時間を取り決めた。

幾日後、董健吾が顧にすでに社会関係の信頼できる人家の住居すまいを探し、たと知らせると、顧順章は旅館に住むほうが個人の家に住むよりは好い、出入りが便利だし、宿泊が自由だという口実で拒絶をした。不日、董健



写真① 1930年代の董健吾



写真② 晩年の董健吾

董霞飛・董雲飛の『神秘的紅色牧師 董健吾』より

吾が劉少岩から知ったことだが、顧が住んでいた世界旅館は漢口の大流氓で洪幫（哥老会系の秘密結社、民国になって国民党と繋がる、紅幫とも書く―筆者注）のボス、武漢行営偵緝処長の楊慶山が握っているとのことなので、ただちに顧に警戒するよう告げ、すぐに（「虎口」を）離れて災いに遭うことを避けるようにいった。何と（自ら大風大浪の中で闊蕩してきたと認める）顧順章はこの申し出を拒絶したのだ²⁰」

『脱險記』は董健吾が主人公であるから張国濤らの動向についてはまったく触れることはなかった。しかし、このことは出発前に周恩来から命じられた主要な任務が顧順章の監視であって、顧順章を助けて張国濤を護衛する役目になかったことを物語る。一日遅れて漢口に到着した張国濤らを出迎えた中には董健吾はいなかった。張国濤の回想によれば、顧順章は密偵たちの夕食時に埠頭に着くよう埠頭に頼み、埠頭で新聞を持った青年が合図して出迎え、人力車で埠頭からさほど遠くない日本租界に連れて行ったという。張国濤らは閑静な通りの一軒家に着くと、すでに顧順章が待っていた。顧順章は道中何事もなかった事を聞くと、ソ区から遣ってくる連絡員を待ため少なくとも三日ほど待たねばならぬと告げた。この家には信頼できる夫婦が住んでいたが、これも租界の密偵に疑われていると話した。張国濤はこの時、顧順章の意外な一面を耳にする。

「私は有名な「花広奇」という大魔術師だよ。漢口では何度も出演したことがあり、大人気を博した。漢口には私を先生と崇拝している大商人や金持ちが何人かいる。その中の幾人かとは密接な往来があるが、まったく私が顧順章だとは知らない。もしここで住みたくなければ、魔術を学んでいる学生の家に移ったらよい。疑われることはないだろうと提案した²¹」

顧順章のもう一つの顔に化広奇という芸名の魔術師であったという張

国濤の驚きは、顧順章の人物像が事件のずっと後に創作されたことを証明している。「叛徒」顧順章を語る時、つねに魔術師が悪いイメージを増幅した。しかし、上で語るように、魔術師という芸人の立場が「社会関係」での親交の広さと深さを作り上げている。そうすると、顧順章のほうがるかに漢口の土地と人に明るいはずで、すでに、述べたように、董健吾に何も信頼できる家を探してもらうことはなかった。董健吾が顧順章のために「社会関係の信頼できる人家の住いを探した」のであれば、身の安全を図るためでなく、別の意図、すなわち顧順章を眼の届くところに止めて置くためであったに違いない。

じつのところ、張国濤らをソ区に送る連絡員に托した後の顧順章の動向については不明な点が多い。すでに述べたことだが、顧順章は張国濤らを鄂豫皖ソ区に送った後、薬品や銃器を棺桶に入れ、出棺式の行列を取って町から運び出し、郊外に出ると埋葬し、連絡員が紅軍の指揮官に連絡して深夜に埋葬「物品」を引き取っていく。漢口から鄂豫皖ソ区へのルートではなかったが、ソ区に緊急の物資を運んだという指摘はすであつた。また、魔術団の一座を組んで、中央ソ区との連絡網を開いたあと、漢口で向忠発と落ち合つて井崗山に送り届ける計画であつたという。つまり、顧順章が漢口に遣つてきた時期や目的については様ざまな異説があつたのである²²。

ただ、後妻の張英琴から新しい情報を得た孫曙は、顧順章はそのまま武漢に滞在し、特科の張増謙と宝華街偵緝処近くの怡園^{かたわ}傍らの世界大旅行社に住んだという（本誌六一九号三二七―三一八頁）。董健吾が投宿したのはセント・ジョーンズ大学の同級生の劉少岩（またの名は秉儀）の家であつた。この劉少岩という人は当地の暨済水利電力会社の経理として勤めていたが、董健吾は漢口に来るまでにすでに宿泊することを決めていたのか、また漢口に来る前に劉少岩とどのような往来があつたのかについて

は不明であるが、単なる大学時代の「親友」ではないことは確かである。董健吾の伝記でもっとも詳細と思われる董霞飛・董雲飛の『秘密的紅色牧師董健吾』には劉少岩の名前は二つの場面にしか出てこない。周蕙の公式の伝記にも二度、劉少岩の記事が出てくる。いずれも董健吾が党と関係が絶たれ、経済的な苦境に立ったときに、劉少岩の仲介で宋子文、周仏海に職を求めた場面である。

漢口から「脱險」したあと、董健吾は周恩来から上海から離れて身を隠すよう命じられる。実質的に党との関係を絶った。周蕙はこの時の様子をこのように言っている。周恩来と別れたあと、潘漢年の手配で中共秘密黨員の楊度のところで数ヶ月の間、隠れることになった。……運悪く、楊度はまもなく亡くなった。……董健吾は外向的な性格であり、長期の避世生活に耐え切れず、たえ難い焦燥感にとらわれた。劉少岩はこのことを知ると、セント・ジョーンズ大学の校友で、国舅（蒋介石の妻、宋美齡の弟のこと）宋子文を訪ねて関係方面にちよつと話を通してもらつてはどうかと提案した。こうして、董健吾は学生で宋子文の弟、宋子良と劉少岩を伴つて宋子文に会いにいった。校友ということに免じて、口を利いてもよいと宋子文は応諾し、関係部門に網の一面を開かせ、董健吾にもう困らせるようなことをさせなかった。条件として董健吾自身にも多くの制約が加えられ、どんな逸脱の行動もとってはならなかった。董健吾は長い間、身を潜め、やつとこの風向きはなりをひそめた。²⁴

「網の一面を開かせる」とは、罪を犯した者に前非を悔いて生まれ変わらせることで、ここでは共産党との関係を悔い改めて生まれ変わるという意である。国民党の用語でいえば、「自新」であり、共産党との関係を絶つことを促されたのであった。

もう一つの場面はこうだった。この時も董健吾は苦境に立っていた。一九四〇年の秋、董健吾は日本軍（情報機関？）からの通緝と生活の困窮

という二重の打撃を受けていた。見かねた劉少岩は周仏海に就職先を依頼した。周仏海は四十年三月に汪精衛の国民政府が成立すると、財政部長兼警政部長、中央税警總団總団長、清郷委員会副委員長、新国民促進委員会副委員長を歴任し、政府の枢要にいた。周仏海は董健吾に会うと、中央警官学校訓育処長の職に推薦した。そのあと、董の家族は大人数で、支出が多く、しかも賃金は少ないことを考え、名義だけの中央儲備銀行に就け、二箇所から収入を得るように配慮した。²⁵

劉少岩による就職の斡旋は、二つのケースとも共通する配慮が見られた。周恩来は顧順章が必ず叛変して党中央の情報をすべて自供すると確信して、一番に狙われるであろう董健吾に上海からの脱出を命じた。この時点で、周恩来が何故、顧順章が叛変して自供すると判断したのかは、事件の核心に迫る問題であるが、董健吾の本心は別として周恩来にとつての敵は国民党政府であった。ところが劉少岩はその敵側に董健吾の就職を依頼したのだった。南京政府の要人、周仏海に就職を頼んだ時もそうだった。一九三七年八月の「八一三事変」の前夕、董健吾は上海抗日行動総隊情報処長になって、「上海ひいては全国をわきたたせた日寇に打撃を与えた壮挙に参加した」。八月十六日の夜、九時ごろ、浦江に停泊中の戦艦出雲が何者かに後尾を爆破される。出雲の爆破は董健吾が何子玉、「国民党元老」と周密な計画のもとに実行された事件だった。しかし、董健吾の「軽拳盲動」は党との関係を断ち切ることになった。劉少岩が董の救助を求めたのは「傀儡政権」の要人、周仏海だった。劉少岩はいつも董健吾の当面の「敵」側に救助を依頼した。董健吾の意志を欠いた行動に対して温情的な忠告をしたようでもあった。²⁶

董健吾の就職には後日譚がある。

董健吾が中央警官学校に就職すると、かつての教育管理の経験を生かし、校長鄧租禹と学生に好感と信頼を得た。しかし時がたつと、董健吾

の身边に二人の怪しげな人物が近づいてきた。董健吾は四六時中、二人の行動を窺った。一人は輪訓(順番の訓練)大隊の洪という姓の大隊長で、至る所で董健吾の過去の経歴を嗅ぎまくり、何かを聞き出すとすぐに校長鄧祖禹に密告した。鄧祖禹は、洪某の行動は董健吾への嫉妬であり、個人間の恩と恨みに属することだと考え、洪某の密告を聞き流すことにした。それだけでなく、鄧祖禹は洪某の密告を董から反応を還させ、董健吾が洪某と団結して協力し合い、それぞれ慎重に事に当たると望んだ。

このような話はどこかで聞いたことがある。董健吾は馮玉祥のところまで共産党との関係を疑う風聞が流れ、結局、鄭州の部隊を離れざるを得なかった。馮玉祥の話と同様、南京での話も董霞飛・董雲飛の伝記に拠っている。子どもたちは後年(五十五年)の潘漢年事件に連座して逮捕された父の冤罪を雪ぐために、懸けられた容疑を検証した。したがって、上記の一文も董健吾の立場から無実が語られているが、彼をとりまく状況を情緒的に概観しただけで何ら説得力をもつものではなかった。このような記述はもう一人の人物に対する叙述においても同様であった。

董健吾が南京で応対に困った人物に孫健太郎大佐がいた。孫大佐は中肉中背で、年恰好は四十をすこし出たくらい、口先が立ち、いつも中日親善、東亜共栄を口にするが、内心は悪辣で、南京大屠殺の劊子手^{ゴキウシテ}だった。董霞飛・董雲飛は孫大佐が何故、董健吾を絶えず見張っていたかは述べていないが、董が警察学校の正門に入ると、すぐにいろいろ手をつくして董がどこのどんな組織の人であるかを調べ、また洪某の報告を検討したが収穫はなかった。しかし、太郎^{マヤ}はあきらめず、この面紗^{ベール}をかぶった董生(日本語で生は先生の意味―原注)にちつと会って見たいと思った。この話が実話なのか作り話なのか定かでないが、そもそも日本人に「孫」という姓があるのかどうか、大佐で「官邸」に住むほどの「孫健太郎」とは何者なのかははっきりしない。以下の董霞飛・董雲飛の記述はまる

で滑稽な作り話のようである。^⑧

ある日、孫健太郎は官邸に董健吾を招き、日本料理でもてなした。名目は宴請^{ショウテイ}であったが、じつは偵察であった。席間、孫健太郎は董の仕事の成果をほめ、二人の名前は同じ「健」という字があるから異国の兄弟同士だと自慢した。董健吾ははじめて心を許し、意気投合した。孫健太郎は自己の経歴を話し、また中華の文化、民族の気節を称え、中国に対する「友善」心を示した。董健吾も自己の生い立ちを語り、いかに武術、体育、絵画、書法を学んだか、いかに教育事業に取り組んだかを洗いざらいさらけ出した。かくて太郎^{マヤ}とはまるで旧知の仲のようになった。^⑨

董霞飛・董雲飛は、孫健太郎はこのような場を設けて董健吾から何の本音を探ろうとしたが、董は「落ち着き払った様子で、語る言葉も完全無欠で一分のすきもなく、すこしも撃つべき破綻はなかった」と述べて、一寸の遅れも取らなかつた父の態度を強調する。孫健太郎は董健吾の告白が事実であるかどうかを確かめるべく、武術の試合を申し込んだ。最初に中国武術での対決を申しでたが、董の学生時代に鍛錬した技には太刀打ちできず、「夜郎自大」な太郎は腕に覚えのある柔道の試合を挑んだ。

「二人は上着を脱ぎ、身体を伸ばし、手をあわせて挨拶し、試合を始めた。太郎は猛虎が餌食を捕らえるように、じりじりと迫ってきて、董生は小幅で動き、東かと思えば西に敏捷に身をかまし、守りを攻めに替えた。何度かの応酬をへて、太郎は身を董生に近づけることができなばかりか、すでに息をはずませていた。董生はチャンス到来と見て、迅速、耳を覆うに及ばざる手法で、手を探り、ついに太郎の肘と肩がつながる部分を脇に挟んで、勢いに任せて身をまわし、背中で高々と持ち上げ、さらに三百六十度回転させて、軽々と地面に放り投げた。傍にいた日本軍の護衛兵はびっくりして顔色を失い、殴りかかろうとしたが、太郎は日本語で護衛兵に早口で叱責したので、その護衛兵は頭を下げ、腰を屈

めて、ハイ、ハイ」といって、後ろに退いてドアまで行き、身をひるがえして去った。この時、董健吾は急いで太郎を助け起こし、口で失礼と言った。太郎は顔を真っ赤にして、さらに一回、一回、よし、よし、もう一丁、もう一丁」と掛け声をかけた^⑧。

董霞飛・董雲飛が上記のような滑稽な逸話を載せたのは、あの狡猾で横柄な日本の軍人（おそらく日本の特務機関をイメージしていた）に対しても董健吾は毅然とした態度で対応したことを誇示するためだった。潘漢年は汪精衛政権と接触し、日本の特務機関との関係が反革命行動と見なされて、長年投獄された。董健吾はこの事件に連座して日本軍部に屈從したスパイと見なされる。董健吾の子どもたちは、あのように日本軍人に敢然と立ち向かった父が日本のスパイであったはずはないと信じたかったのである。しかしながら、子どもたちの期待とは裏腹に上記のような笑い話のような逸話は決して冤罪を晴らす材料とはならなかった。日本に対する不正確な認識による事実の証明はかえって資料の信頼性を失わせてしまう。じじつ、党史作家周蕙は董健吾の公式伝記に、董健吾と孫健太郎の接触の事実を記載しなかった。周蕙にはあまりにも滑稽な作り話に見えたのである。本章の前編に、子どもたちが書いた父の伝記からは歴史の真実をすべて求めることはできないと述べたのはこのようなことを指していたのである（本文一九頁）。

さて、劉少岩のことからずいぶん話がそれてしまった。ただ、無意味な話を延々と述べた訳ではない。劉少岩はたんに董健吾に宿舎を提供したというだけでなく、漢口での顧順章の監視に重要な役割を担ったと思われるのである。

顧順章と漢口に遣ってきた董健吾は真っ先に劉少岩の家を訪ねた。セント・ジョーンズ大学の同級生であった。前述のように劉少岩は宋子文と親友であった。一時、董健吾は宋子文から国民党についてゆこうと誘

われたことがあった。とうぜん劉少岩が国民党の何らかの機関と関係があったであろう。董健吾はそれを知っていて連絡を取ろうとした。顧順章が怡園近くの世界旅館（周蕙、董霞飛・董雲飛は新世界飯店、王光遠は新世界旅館とする）に投宿した時に、董健吾は劉少岩から聞いたこととして、世界旅館は漢口の流氓で洪幫のボス、武漢行營偵緝処長の楊慶山が経営している、不測の事態が起こらないうちに離れたほうがよいと勧告した。すると、こういうことが確認できる。董健吾は劉少岩に今回の来漢の目的、顧順章の党の位置、経歴などを洗いざらい話していたのだ。推測の域を出ないが、董健吾は国民党当局に捕まるよう協力を要請し、二人の間でその計画が練られていたかも知れない。だから、計画の妨げになるような事態を楊慶山にさき起こされては困るので、顧順章に速く旅館から退出するよう迫ったのである。この後まもなく、董健吾は社会関係の頼れる人家の家を探してきて直接監視できるようにしたが、顧順章は転住を拒絶した。この時点から董健吾をルートとする周恩来の策謀は挫折したのであった。

鄭先海の『脱険記』は董健吾の任務がごとごとく党の規律を無視する顧順章の行動に遮られたと強調する。しかし、董健吾の任務がそもそも何であったのかは明白でなく、本当の目的があつても公にできなかったもので、相変わらず顧順章の放縦な行動だけを取り沙汰した。一方の顧順章も漢口でいまだどうしたらいいのか、行動を逡巡していたにちがいない。

「顧順章は世界旅館のダンスホールで白い服を着て、白い帽子（を被り）、（脚に）白いハイヒールを履いたモダンな（妙齡の）娘と知り合い、いつも落ち合う時には顧は必ず彼女を伴ってやってきて、（こうすること）で）国民党の密偵の眼を避けることが出来るのだといった。このモダンな女性は始めて董健吾に会うと、ずけずけと私は顧の姨妹で、嚴丹莉というだと紹介した。（また甘ったるい声で、あら！みんな上海人よ」と

いった)。振る舞いの軽薄な(この)嚴丹莉(という女)は、行動ははかり知れず、また何度も董の経歴や職業を探った。(特工要員という)職業のするどい感で、董健吾はさらに二人が茶館で接触した時に、茶座テーブルの傍の窓から中を窺う者がいるのを発見した。そこで落ち合う場所と方法を変更しようと申し出た」

「(旧)漢口というこの(豪華華奢な)、派手で色っぽい世界で、顧順章はこのモダンな女性と酒色のかぎりをつくし、持ってきた生活費をすっかり使い果たしてしまった。四月十九日(日曜日)、漢口「新市場」(いまの民衆樂園―原注)の魔術館前に出演者を募集する広告が貼りだされた。巧みな魔術を操り、またちようど金に窮していた顧順章は思わず知らず腕がむずむずした。彼は董健吾を訪ね、いっしょに舞台上上がって魔術をやるうとさそった。董健吾は平日にも相当の魔術を愛好し、かなりの演技を持っていた。ただ、公然と顔を出すことは党の特科工作規律に違え、(きわめて自己を暴露し易いので)、そこで同意しなかった。顧(順章)は董の再三にわたる中止の勧告を聞かず、勝手に自ら「新市場」の魔術館との間で、「広寒宮主人」と自称した、契約を交わし、公演の予告も各主要道路口の目立つところに張られ、公然と宣伝した。このため、董、顧の間に深刻な意見の分岐が発生し、論争いざこざが生まれた。董は、今回の護送任務はすでに勝利のうちに完成し、できるだけ早く上海に帰るべきだと思った。顧は、契約はすでに署名され、騎虎の勢いきりい(乗りかかった船の状況)となつていたので、(弦を張り替えることはできない)。どうしても客の前で、舞台上で上演したいとがんとして聞かなかった」

上記の鄭先海の記録は顧順章の放縦な行動をことさらあげつらつたつもりであったが、案外、顧順章の漢口での暗躍を言い当てている。顧順章が世界旅館で知り合ったモダンな若い娘はたんなる遊び相手の女性ではなかった。そんな相手の女であれば、ことさら白色づくめの衣装を取

り上げて印象づけることはなかった。周蕙もこの女性に注目した。彼女の名前は徐小姐で、漢口の有名な社交界のヒロインであった。白づくめの衣装は酒場の女(娼妓)の格好だという。周蕙は徐小姐が当局の回し者であると疑った。その女は董健吾の名前や出身地、職業をねほりはほり訊ねるので、顧順章と工作の打ち合わせができず、一言二言ことばを交わして立ち去らねばならなかった。二人が別れた後、董健吾は女がこっそりと董が去つてゆく方向を窺っているのを見た。董健吾は徐小姐の素性が好くはないと思ひ、顧順章にこの女性に気をゆるし、油断してはならないと求め、彼女との交際を絶つよう勧めた。また、あるとき、董健吾は顧順章と飯店で食事をする口実で接触することになった。出会つたとき、窓の外から中を窺う人があるのを見た。董健吾は以後の落ち合う場所を変更しようと言ひ張つた。顧順章にとつては董健吾の執拗な勧告は要らぬ世話だった。では、いったい顧順章は何をしようと謀っていたのであろうか。

周蕙の話は鄭先海にも出てきたので、話の出処は同じであつたろう。しかし、顧順章を叛徒に仕立てるにはあまりにも稚拙な証言であつた。徐小姐は確かに周蕙が察したとおり漢口行営偵緝処の密偵であつたろう。漢口行営偵緝処長(長江偵緝隊長)の楊慶山の指示を受けていたに違ひない。偵緝処が紅幫の協力で共党の掃蕩を進めたことは、楊慶山の部下、偵緝処副処長の蔡孟堅が回想するとおりである。蔡孟堅は、紅幫の協力によつて、すなわち(あるいはただちに)自首した共党分子を連れて大街小巷で距離をとつて歩き、すぐに機動的な行動が取れるようにした。一ヶ月ほど町を巡回して多くの共党分子を逮捕し、共党機関を破壊したと述べる。これは一九三〇年の秋間のことだった。ただ、前節での回想を引用した際、蔡孟堅は紅幫を共匪と同じような表現で使つたと思ひ、わざわざ紅幫に「きょうさんとう」のルビをふつた。紅幫はもと

もと洪幫と書き、反清復明を標榜した古くからの秘密結社であった。民国になって国民党に近づくと、共産党の下部組織は紅幫の組織の構成員と重なり合っていたのであろう。^④

三十一年一月、漢口で蒋介石暗殺未遂事件が発生する。前年の八月に聶榮臻から追放の引導を渡され、三十一年一月の四中全会后、周恩来から蒋介石の暗殺指令を受けて漢口に赴いたのであれば、顧順章事件は蒋介石を暗殺する計画からはじまったというフレデリックの確信に満ちた証言と符合する。しかし、暗殺計画で顧順章はどのような役割を担い、計画は何故、失敗したのか、顧順章はその後、どのような行動を取ったのかは諸説紛々として真相を突き止めるには根拠に乏しい。前節においては諸説を整理して以下のようなストーリーを立てておいた。^⑤

顧順章は魔術団の一座を装って漢口に乗り込み、現地の中共軍委を動員し、漢口各界の討逆勝利大会の機に乗じて蒋介石の暗殺を謀った。いよいよ決行というとき、計画が漏れ、華夏（夏華）という共党の重要人物が自首したいと申し出た。華夏は蔡孟堅の手引きで上級幹部と会い、計画の一部始終を自白した。かくて蔡孟堅は容疑者を一網打尽にし、組織をことごとく破壊した。さて、前節では、計画のすべてを暴露した華夏（あるいは夏華）なる人物について曖昧なままにしておいたが、ここで大胆に華夏を顧順章に置き換えて見よう。蔡孟堅はこの人物を四川の人だというだけで、本当の名前さえ覚えていなかった。前節では顧順章がこの華夏に計画を密告させたと考えた。しかし、蔡孟堅は華夏を上級幹部に会わせて報告させた。これによって暗殺計画の全貌が明らかになり、計画は未遂に終わり、加えて蔡孟堅は蒋介石から過分の賞賛と報奨金をもらったのである。何故、蔡孟堅は華夏をすぐに上級の幹部のところに関連して行って報告させたのだろうか。多額の報奨金を受けたのは単に蒋介石の危害を未然に防いだからであろうか。国民党の情報機関が共産党

対策に採用していた「自新政策」にとって仮に中央政治局委員候補、中央特科の責任者である顧順章が自首したとなれば、国民党政府にとって大きな成果であった。じつさい、陳立夫は、さきに自分が採用した自首自新政策の最大の成果は顧順章の帰順であったと述べていた。

一方の顧順章も早くから国民党政權に転向する意向があったという証言がある。本稿は顧順章の「叛変」が巧妙に仕向けられたシナリオであったことを論証しようとするものであったが、いったい何時、何処で「敵側」に意志を伝えたのであろうか。先に引用した証言をたびたび持ち出す、陸揚守が、「顧順章は共産党の重大な任務を奉じて、漢口に赴いて某重大事件を処理したときに、確固として共産党を離脱する宏願（ねが）を立て、漢口に至ったあと、すぐに国民党当局に自新した」と語るのがもつとも納得できる回答と言えよう。^⑥前回の引用では若干読み方を取り違えたが、顧順章が共産党からの離脱を考えるのは漢口に赴く前で、漢口で某重大事件を処理したときに断固とした離脱の大願を立てたのであろう。漢口に行くとき顧順章はすぐに自供して国民党側に就いた。ただちに南京に行つて当局の責任者にあつたとも言っている。だが、某重大事件を処理したときというのは何時のことであろうか、華夏（顧順章）が蔡孟堅に事件の計画を暴露したときであれば、一月か二月の間で、その後、すぐに「叛変」したのであれば、二月以降、顧順章はどのような行動を取っていたのであろうか。通説とおりの四月の末に逮捕されたのであれば二ヶ月ほどの空白がある。^⑦

蔡孟堅は漢口での共産党一味の蒋介石暗殺計画を語ったが、計画の首謀者は顧順章だとは言わなかった。顧順章事件は蒋介石暗殺事件に始まったとは思わなかったのである。しかし、蔡孟堅の情報にもとづいたと思われる徐恩曾の報告では、三十一年の一、二月間、顧順章は魔術団一座を率いて漢口にやってきて黎明の芸名で数ヶ月間、公演を続けた。そ

の間、出演以外のときは近くの太平洋飯店に宿泊していた。彼を訪ねて来客がひっきりなしにやってきた。徐恩曾によれば、その中には何人かの共産党嫌疑者や高級国民党员がいた。蔡孟堅はこれらの来訪者に注意を引き、「顧順章を共産党と接触のある人物」として監視したという³⁸。

この間、蒋介石暗殺計画は着々と進められていた。ホテルに訪ねてくる共産党嫌疑者はその連絡員であったのであろう。すると、暗殺計画を蔡孟堅に漏らした華夏は顧順章ではなかったかという推測はみごとに外れる。じつさい、蔡孟堅はずっと後まで顧順章が何者かを知らなかった。顧順章はそのまま魔術団の公演を続けたが、共産党からの離脱を決意したのが事件を処理した後であれば、蔡孟堅とは別のルートと連絡があったに違いない。高級国民党员がホテルに訪ねてきた目的は、顧順章と国民党に投降する段取りを打ち合わせるためだった。推測を重ねると、顧順章が連絡を取ろうとしたのは国民党の出先機関ではなく、もつとうえの国民党中央の責任者ではなかっただろうか。顧順章は漢口で逮捕された（自首した）後、執拗に南京に早く連れて行って蒋介石に会わせて欲しい要求したのは、その間の事情を如実に物語っている。

上海で顧順章の党追放を策謀していた聶榮臻らの「実行グループ」は、顧順章が国民党への「叛変」を決意したのを知ると、漢口へ派遣して党の連絡ルートの開発を命じ、実質的に特科から追放した。顧順章の行動を探るために、漢口の党組織に嚴重な監視を命じた。

漢口の党組織にはかなり危険な任務を要求した。蒋介石の暗殺計画が破綻すると、上海の指令部（聶榮臻らの実行グループ）は漢口偵緝処の副処長で鑛共專家の異名をとった蔡孟堅の懐に密偵を潜入させ、南京と漢口の国民党調査科の動向を探らせることにした。そのためにまず国民党に自首して蔡孟堅の懐に潜り込み、彼の信頼を得なければならなかった。宋恵和は中共漢口行動委員会の一員で、三十年九月に国民党憲兵隊に連

捕され、叛変後、周大烈と改名して偵緝処の秘密調査員となった。前出の蔡孟堅の回想に述べていたように、宋恵和は蔡孟堅が最初に知り合った自首分子で、信頼を得て身辺秘書となった。蒋介石暗殺計画の失敗後、尤崇新ら六人の首謀犯は神妙に国民党に自首した。ところが尤崇新らは上海の党中央から潤沢な工作費を与えられて蔡孟堅の暗殺を命じられる。尤らは蔡孟堅の殺害を謀るが宋恵和に重傷を負わせただけで再度、蔡孟堅に逮捕された。かろうじて生き残った尤崇新はもう一度手柄を立てて罪を償いたいと血書を書いて懇願した。この時、宋恵和は瀕死の目にあわされた尤崇新の助命を熱心に蔡孟堅に請うたという。菜切り包丁で頭頸や耳、手を斬られ、瀕死の傷を負わされた相手をわずか一ヶ月あまり後に、今度は命乞いをしてやるとはどんな心情なのか分からないが、上海の「実行グループ」のシナリオを忠実に実践したのに違いない。ひよつとすると、蔡孟堅と宋恵和、尤崇新の周到な打ち合わせのもとでの行動であったと考える方が辻褄が合う³⁹。

尤崇新は前述の黄凱の証言にあったように、ずっと前から武漢の党組織で工作していた。中央軍委特務科ができた時、特務科で李強の部下であった。特務科では王竹樵と名のついていたが、李強は同一人物だと断言する。中共中央が上海に移ると、上海滬西区委書記となり、三十年末、武漢（漢口）市委書記、中共長江局の責任者となった。漢口市委（長江路）のとき、かつての中共黨員、黄佑南の手引きで「国民党湖北省公安局長」の蔡孟堅に逮捕された。ちなみに、この黄佑南は蒋介石暗殺計画を暴露した華夏であったという可能性もある。次節で詳述するが、組織部調査科股長の張文は、漢口の街角で顧順章を発見したのは黄佑南だったといっている⁴⁰。

何度も引き合いに出すが、李強は、顧順章が逮捕された情報を上海で受け取ったと確信を持って語っている。逆に言うと、李強ら「実行グルー

「プ」は漢口での顧順章の行動を逐一把握し、叛変するような行動を発見したらただちに報告するよう命じていたのである。尤崇新は李強の部下であった。顧順章も特務科の責任者であったからよく知っていた。顧順章を見張るには打ってつけの人物だった。李強が最初に情報を得たのは特科の通信を掌握していた責任者であったからである。そのあと、まっしぐらにグループのリーダー聶榮臻のところに駆け込んで、首尾よく顧順章が捕まったことを報告した。聶榮臻は大急ぎで周恩来の住いに報告に行ったが、あいにく周恩来は外出して留守であったので、夫人の鄧穎超に顧順章が逮捕されたのではやく他所に引越すよう伝えた^④。

もともと聶榮臻は後に李強からの報告を隠蔽して、錢壯飛が自ら上海に来て党中央に顧順章の叛変を報告したと発言を変ええる。

顧順章が獲捕されたのを確認すると、逮捕に係わった尤崇新が李強に伝え、李強は聶榮臻に、聶榮臻は周恩来に伝えることになっていたのは事前に決められていた。この連絡網こそ国民党に顧順章を売り渡す、あるいは逮捕されるように仕組んだ計略があったことを物語っている。しかも、逮捕された顧順章が国民党当局に叛変することはとくに織り込まずみであった。しかし、周恩来、聶榮臻らの計画には致命的な誤算があったことがやがて露呈される。顧順章は国民党当局に向忠発の例にもあるようにいずれば殺されるであろうと高をくくっていたのである。

ところで、はたして国民党情報機関の組織部調査科（のちの中統）はどのように顧順章と連絡を取り、転向（自新）を促す工作を進めたのか、どのようなところ、さきに筋書きを描いたようにすすきりした確証があったわけではない。もつれた糸はいぜんこんがらかったままである。

漢口行営偵緝処の蔡孟堅が漢口に遣ってきた顧順章をずっと監視していたことはすでに述べておいたが、蔡は顧順章が宿泊している新世界飯店（世界飯店、世界旅館、世界大旅社ともある）から散歩に出かけると、機

会を見て写真を撮り、それを南京の特別調査局総部（調査科の大本営）に送り、監視している黎明（顧順章の魔術師の芸名）という人物が顧順章であるかどうかを照会した。徐恩曾は蔡孟堅に逮捕を命じ、ただちに輪船招商局の船で南京に連れてくるようにいった^⑤。これは南京の徐恩曾もはやくから顧順章の動向に関心を持っていた証拠であり、徐恩曾が顧順章事件を主持していたことを証明している。

上にいう漢口に来てからというのは、顧順章が董健吾と遣ってきた四月一日のことであろう。期日はずれるが、フレディリックは徐恩曾の報告書を引いて、顧順章が魔術団の一座を率いて来漢したのは一、二月の間で、魔術の公演は好評を博したという。ただ、この時の宿泊地は太平洋飯店で、旧県城内の中山路付近にあった。ここに毎日のように共産党員と疑われる者や高級国民党員が出入りしたので、蔡孟堅の注意を引くことになったと述べている。この二つの記事の出所は同じであろう。南京の「大本営」にいる徐恩曾は現場の蔡孟堅の報告に依拠して顧順章事件の記録を残した。徐恩曾の報告書、前出の「紅隊」を消滅する暗赤経験簡述」というのがそれである^⑥。この報告では、南京の調査科本部は顧順章の「自新」情報を知ると、武漢で顧順章の身柄を拘束することにし、漢口行営偵緝処の蔡孟堅に顧順章の行動を監視させていた。いつも顧順章にまといついていた嚴丹利（徐小姐）は顧の行動の目印になっていたのであろう。劉少岩も南京の徐恩曾と、あるいはもつと上の政府要人となんらかの連絡があった人物であったに違いない。世界飯店に滞在している魔術師は内偵している顧順章ではないかと疑った蔡孟堅は南京に問い合わせた。徐恩曾は、顧順章に間違いのないから捕捉して汽船で南京に連れて来るよう命じたのであった。そこで蔡孟堅は漢口行営偵緝処の秘密偵察員を総動員して顧順章の捕獲に全力を挙げた^⑦。

顧順章の拘束に場所や発見者が異なるのは回想した偵察員が逮捕時の

状況を同僚から聞いたことを供述したものであろう。おそらく顧順章は公演を終えたあと、部下の張崧生と漢口当局に自首する考えであった。このことはすでに当局に通知していた。顧順章を確認したのは尤崇新(王竹樵と同一人物)で、拘束した場所は公演を終えて宿舎の世界飯店にかえる途中の街路であった。公演を終えると顧順章は中央軍委駐漢口交通站主任の張崧生と接触し、前後一列になってホテルに帰る途中発見されたが、顧は荷物を取ってきたといつて偵緝隊とともにホテルに行き、そのあと行営偵緝処に連行される。これらの行動は蔡孟堅、顧順章の双方にとつても予定とおりであった。漢口での公演の最終日、この日が顧順章の最大の決断の時であったのだ。

董健吾も顧順章からいっしょに舞台にあがって魔術をやらうと誘われたとき、深刻な身の危険を感じた。いよいよ顧順章の逮捕の時期が迫っていること、もう彼に近づかないほうがよいと劉少岩に聞かされていた。董健吾は顧順章とさんざん言い争ったが、公演の中止を思い止めることは出来なかつた。董健吾の言い分は張國濤らのソ区への護送任務はすでに達成したのであるから、すみやかに上海に帰るべきだというものであつたが、これほど顧順章に疑念を抱かせる言葉はなかつた。そもそも顧順章を漢口に追いやつたのは中共特科から放逐するためであつた。董健吾の役目は顧順章を監視することであり、周恩来はあわよくば董健吾も国民党当局の手に落ちることを期待した。

顧順章はこの董健吾の提言を聞いていよいよ国民党への投降を決意したに違いなかつた。

顧順章との共演が間じかに迫ると、董健吾は祖母の危篤を口実に上海に帰ることを告げた。顧順章は董健吾の意図を察知していたが、くれぐれもはやく帰り、すぐにここに戻ってくるように言い含め、また自ら人に翌日の上海行き乗船切符を買いにやらせた。乗船切符を受け取ると、

顧順章に別れを告げ、明日は早く出航するので見送り来るには及ばないとつけくわえた。

董健吾は顧順章の逮捕が間じかであることを知っていなければ、鄭先海が「脱險記」と題するほど危険な状況に陥っていた訳ではなかつた。ただ、じつのところ董健吾が漢口で危険な目に遭っていたのを知ったのは、上海に「脱出」したあとに、董健吾の連絡員であつた老王(歐陽新)から聞かされてからであつた。このことは、鄭先海の「脱險記」が直接の体験をもとにした実録ではなく、のちにかなりの虚構を加えたフィクションであることを物語っている。どこがフィクションなのか、「脱險記」に戻って漢口脱出行を検証してみよう。

董健吾は顧順章から上海行き乗船の切符を買ってもらつて劉少岩の家にかえると、劉はこう告げた。「建國丸はやや貧弱で、(密封条件はよくなく)速度もひどく遅く、またあまり安全ではない。日商株式会社汽船、洛陽丸に乗り換えたほうがよい。(この汽船は豪華で)快適で安全である。劉の妻も傍から口を挟んで言った。家の(使用者)阿福が明日の朝、洛陽丸で上海に行くので、あなたは洛陽丸に乗り換えたほうがいいわ、阿福が沿途、あなたの世話をくれるわ」劉少岩はかくて阿福に董のために(切符を)払い戻して洛陽丸の乗船切符に変えるように言った。この時、董健吾は無性に顧順章に対する一種の不信感が湧きあがり、反して劉の好意に深く感謝する。顧順章が秘かに危険な目に遭わそうとたくらんでいると感づいたのだつた。しかし、この話では何故、董健吾が腹を立てたのかは分からない。これはのちの出来事を前提とした話であつて、それを正当化するための作り話であることがすぐに分かる幼稚なストーリーであつた。

「顧順章に疑いの念を生じさせず、また追跡する人を晦ますために、二日目の(上海に帰る日)の早朝、董健吾は牧師の服を着け、黒眼鏡をか

け、紙くずを詰め込んだ旅行用バスケットを手に持って、建国号に乗る客を装って乗船した。客をせきたてるベルがなると、董はバスケットを棄て、見送りの客に混じって船を降り、埠頭に出ると車を駆けてまっすぐ日商埠頭に行き、洛陽丸に乗り換えた。両船の出航時間は二時間の隔りがあった」

顧順章が董健吾のために買ったという切符は中国人経営の最古で最大の汽船会社、輪船招商総局 China Merchant Navigation Co. 通称、招商局の船舶であつたらう。建国号の船名は確認できないが、けして劉少岩がいうようなポンコツ船ではなかった。そこで、劉少岩の勧告にしたがつて「日商汽船」の洛陽丸に乗り換えることにするのだが、この話はまったくの作り話である。そもそも上海―漢口間を航行する日本の汽船会社は日清汽船株式会社しかなく、日商汽船なる汽船会社は存在しない。もちろん漢口に日商埠頭なる船着場はない。日商汽船という存在しない汽船会社を偽造したのはどうも作者の無知による勘違いだったらしい。NKKKを日本商船株式会社と思つたのだ。しかし、現実に日清汽船に洛陽丸という上海―漢口間の定期便の船は存在する。

『日清汽船株式会社三十年史及追補』によれば、日清汽船株式会社は乗客の急増で、昭和のはじめから新鋭船を建造し、昭和四年（一九二九年）には、涪陵丸、洛陽丸、信陽丸を建造し、それぞれ四川航路、上海―漢口航路、漢口―宜昌航路に配船した。「これらの新船はいずれも新式の優秀船であつて、そのため大にわが社の実力を増加したが、なかんづく洛陽丸は四千噸を越える揚子江の巨船であり、噸数においては招商局の江安・江順の二隻、怡和洋行の公和らの如き相似たものがあつたけれども、その速力・艤装・設備等においては遙かにこれらを超え、長江の女王」と称されたのであつた。

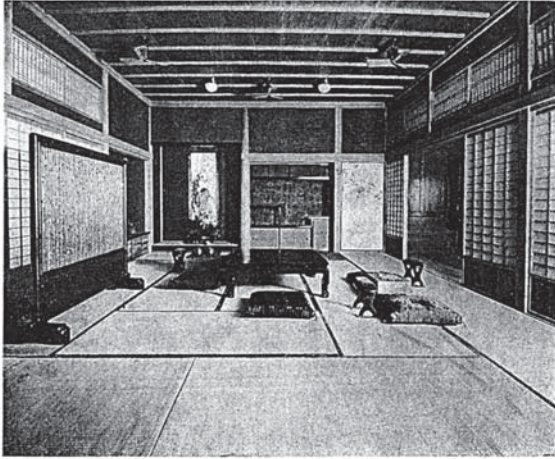
ちなみに、洛陽丸の船体構造の「要目」は以下のものであつた。

周恩来の誤算

洛陽丸 要目表

船質	鋼
種類	貨客船
資格	四級
總噸數	四、三七八・三五
純噸數	二、六九二・〇二
尺 度	長 三三〇呎 幅 四八呎 深 一四呎九吋
平均吃水	滿載 一三呎 空艙 七呎三吋
旅客定員	特一 二〇 特二 一〇 支一 三二 支二 三四 支三 一七二
最大載貨量	二、〇二〇重量噸(四、九二五容積噸)
機關	三聯成 二基(双暗車)
實馬力	三、二二五
速 力	最強一五・二五節
建造年月	{昭和四年(一九二九年)七月二十四日進水 同(同)十一月竣工}
建造所	上海、江南造船廠
摘要	昭和十二年八月支那事變の爲浦東水道に沈没 救助不能

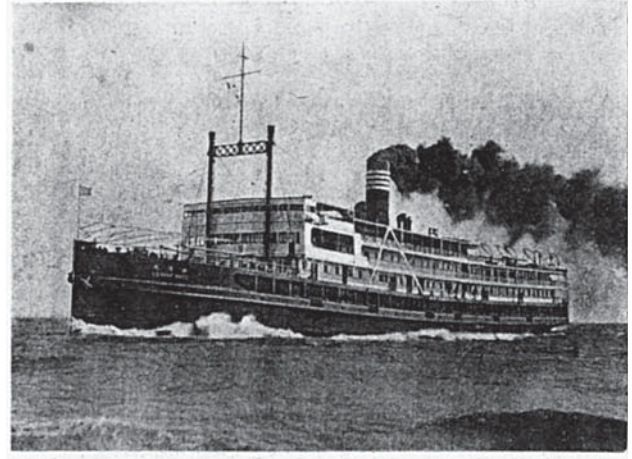
日清汽船株式会社所有の洛陽丸は右の「要目」にあるように「長江の女王」と称するにふさわしい豪華な客船であつた(写真①)。特一等日本間社交室はまるで大名屋敷の座敷のようであり、特一等談話室は大きなホテルのロビーのようであつた(写真②、③)。このような豪華客船が上海―漢口間を一往復十日で運航した。果たして董健吾は劉家の使用人と切符を取替え、無事、洛陽丸に乗船することができたのであろうか。洛



室交社間本日等一特丸陽洛

写真②

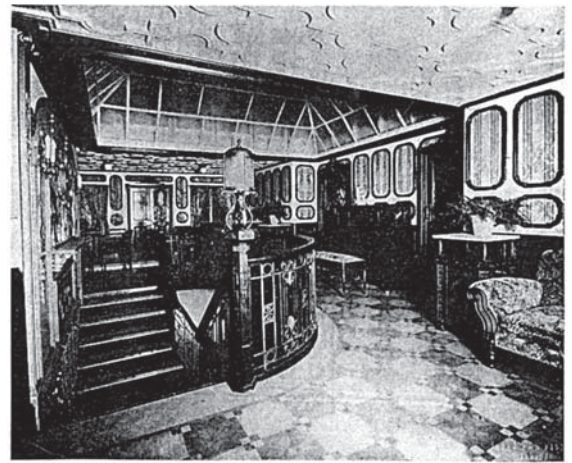
うえで、旅の途中、召使が世話をしてくれるだろうと語った。その言葉の終わらぬうち、夫の劉は召使の阿福に董のために切符をもどして洛陽丸の切符に変えてあげなさいと言った。周蕙はこの会話を、劉少岩は家の使用人に我慢して董のため建国号の切符を返し、改めて洛陽丸の切符を買わせたと説明する。董霞飛・董雲飛は、鄭



丸陽洛

写真①

陽丸「要目」の旅客定員を見ると、特等客室より「支一、支二、支三」のほうがはるかに定員数が多い。「支一、二、三」は中国人専用の客室であつたらうから、劉家の使用人も十分に乗船切符を入手できた。しかし、劉少岩と妻の切符交換の話はまったくの作り話に違いなく、劉の妻は董健吾に洛陽丸に乗り換えるほうがよいと忠告した



室話談等一特丸陽洛

写真③

先海の記述のまま引用し、王光遠は切符の件については何も書かなかった。じつのところ、「脱険記」の作者にとつては董健吾が乗った船の名前などどうでもよかつたのである。顧順章は建国号の切符を董健吾に買い与えたが、董健吾は劉少岩の助言で別の船に乗り換えたという筋書きが重要だったのであり、それは次のような董

健吾の上海への帰途での「事件」の伏線であつた。

顧順章が捕らえられたのは四月二十四日（金曜日）の夕方であつた。

「この（同じ）時、董健吾が乗つた『洛陽丸』はちようど（長江の幾重もの大浪を掻き破つて）、九江に向かつて走つていた。二十四日の晩の十一時頃、『洛陽丸』が九江埠頭に接近したときに、ほとんど『建国号』を追いつこうとしていた。思いもよらず、『建国号』が埠頭に停泊しようとしたその瞬間、岸辺で軍警の声が上がり、人声が沸き立って、まるで大敵に立ち向かうようであつた。『洛陽丸』の乗客はひどく憂鬱な気分になつたが、何が起つたのか分からなかつた。船長は九江埠頭のこのような様子を見て、またここで下船する人がいないのが分かると、もめごとに巻き込まれるのを避けるために、船を岸壁に近づけず、そのまま上海にゆく命令を伝達した。そこで、『洛陽丸』は汽笛を鳴らし、長江下游に向かつて走り去つた」

「董健吾が乗った『洛陽丸』は二十六日（日曜日）の午後、虹口のNKK日商埠頭に到着し、埠頭に着いて客を降ろした。董健吾はいったん家に帰り、すぐに秘密交通員老王に電話をした。董の話し声を聞くと、老王はひどくびびりし、慌ただしくどのようにして上海に帰ってきたのかを訊ねた。董は電話で簡単に『洛陽丸』に乗り換えて帰ってきた状況を話し、かつ周恩来に会いたいと頼んだ。老王は董の陳述を聞き終わると、長々とため息をついて、董にゆっくり休みなさいと言った。一時間後、董健吾は電話の連絡を受け、夜の七時半に周恩来と会うことになった。董健吾が危険な「事件」に遭遇しながら、無事上海に帰還できたというのは、どうも九江での騒動に巻き込まれずにすんだことだったらしい。だが、「脱険記」のストーリーの大部分がフィクションであることを知っているわれわれにとつて、董健吾が危険な目に遭ったとは思えない。

二十四日の夜、十一時頃、建国号が九江埠頭に着岸すると、軍警が動員され、大捜索が開始された。捜索の目的は二十四日の朝、漢口を出航した建国号に中共特科の工作員、董健吾が乗っているはずだ。軍警の捜索隊は建国号の乗客を一人一人首実験したのである。もし洛陽丸に乗り換えず建国号に乗ったままであったなら、確実に逮捕されたに違いなかった。董健吾はこの情報を周恩来から直接聞いた。

二十六日（王光遠は二十七日の午後とする）の午後、上海のたどり着いた董健吾は、その夜、七時半に大中華飯店五〇六号の部屋で周恩来と会うことになった。周恩来は会うなり、しっかりと董の手を握って、「君は帰って来ないのかと思った！」と言った。部屋には連絡員の老王も同席し、嬉しそうな表情をして、しきりに座るよう勧めた。董健吾は一通り漢口での経緯を報告した。周恩来はかれが取った行動を誉め、つづけてこう言った。「君は今回とても危険だったんだよ！身の脱出が速かった。そうでなかったらきっと災難に遭っただろう」董健吾は周恩来の話の聞

いても、さっぱり要領を得なかった。周恩来はこう説明した。

「南京方面から確実な消息を得、顧順章は君が漢口を離れたその日の夜に国民党武漢行営に逮捕され、すぐに叛変し、君と他の同志を自供した。君を逮捕して法により裁くために、国民党九江方面は建国号に対して全船の大捜査を行い、船票は顧順章自らが君に与えたものだが、しかし船上では君の人影を探し出せなかったので、そこで全船戒厳し、この船を九江以下の埠頭は一律立ち寄らず、そのまま上海に行かせることにした。われわれは最後の情報を得、『建国号』が上海の十六埠頭に到着したあと、軍警は全船の百余名の旅客を巡捕房に拘留して、一人一人訊問したが、結局、一人も捕まえることはできなかった」

周恩来は最後にこう言った。

「君は九死に一生を得て、危険を脱して帰って来た、君に対して祝賀を表したい。いま、君の報告をとおして、組織のうえで随時顧順章の漢口における真実の状況を把握せしめて、われわれの研究の下でさらに一步の工作に利用したい」

周恩来の話は筋道が通っていて董健吾の行動を明白に説明しているように見える。だが、董健吾の漢口行の目的は、本当は何であったのか、本来の目的は達成されたのかについては、周恩来の説明は曖昧模糊としていて、一つ一つ釈明には疑念をいだく。そもそも董健吾の漢口脱険行は船の乗換えが大前提となっていた。事実在即するかどうかも一度検証してみよう。

董健吾は二十四日の早朝、建国号に乗船する振りをして、すぐに車を走らせてまっすぐ日商埠頭に駆けつけ、洛陽丸に乗り換えた。鄭先海は董健吾が漢口を離れた日を特定せず、「上海に帰るその日、あるいは二日目」の早朝とする。しかし、乗船した洛陽丸はたしかに存在するが、鄭先海がというような日商汽船の汽船ではなかった。「脱険記」のもっとも重

顧順章事件で多くの文献に引用される張国棟（張文）の回想によれば、一九三一年四月のある日、尤崇新は輪渡碼頭付近で顧順章を発見し、尾行していた特務に逮捕される。蔡孟堅は顧に軟化誘叛を取り、自ら接待して煙草や茶をすすめた。はじめ、顧はひと言もしゃべらなかつたが、そのあと、蔡は「われわれは面識がないが、私は君を知っている、君もきつと私を知っているはずだ。多くを言う必要はあるまい。生きたければ、知っていることをすべて話しなさい。いやなら死があるのみだ」と脅し、最後にこう言った。「君を南京に送ることにした、君自身よく考え、自分の前途を選択しなさい」^⑧。蔡孟堅の訊問は形式的なもので、すでに南京の大本営から指令のあった顧順章の南京への移送を遂行するものだった。顧順章の取調べに対してかなり具体的な証言をした黄凱によれば、一週間の期限の最後の日であった六日目、尤崇新は中山路で顧順章を発見し、陶陶旅館まで追跡して逮捕した。同時に彼の部屋で、小張という者も逮捕された。顧順章の審問には武漢行営処の將級クラス全員が加わった。審問には「疲労審問」を取り、いろんな方法を用いたが、何れも効果はなかつた。あばたの尤（尤崇新のあだ名）は顧順章に、「化広奇兄さん、すこしざつくばらんになろうよ！われわれが国民党に参加したのはいっしょに革命をするのではなかつたのかい？あなたは上司の顧順章同志だろう！」顧順章は人間違いだ、君などもともと知らないと否定した。そこで黄凱は口を挟んでこう詰問した。「まさか、押収した書類にもせものだというのはあるまいな？」顧は睨みつけて答えた。「お前らのようなゴロツキは人に濡れ衣を着せるやり手だ」黄凱は頭にきて、聯保里の名妓雲弟の老五家に行つて飲み食いし、麻雀をした。夜半になるまでどんちゃん騒ぎをしていると、自首人の黄堅と当番兵が飛んできて、「奴が白状した、老蔣に会わせてくれたら自首する」と言っていることを告げた。そこで黄凱と蔡孟堅はすぐに徐恩曾に秘密電報を打つたという。

のちに共産党に投降した黄凱の回想はかなり虚言を弄するところがあるが、顧順章が国民党のもとに下つたのは自首であつたことなど、言葉の端々に真実が語られている。このあと、武漢行営処の顧順章に対する対応を述べて、翌日、すなわち四月二十五日の払暁、何成濬は顧順章を接見したが、顧に対してはとりわけ丁寧であつたという。顧順章はなお頑固に自ら老蔣に会うまで自首しなかつた。すぐに、南京から返電が来た。老蔣はいつでも会つてもよいということであつた。こうして、顧順章も供述することはなかつた。「われわれは本来、第五航空隊の飛行機で押送するはずであつたが、座席が少なかつたので、改めて楚豫艦を用いることにした。何成濬は憲兵小隊を派遣して護送し、それにわれわれの十数名の特工が加わり、何成濬が押送した」^⑨。

黄凱によれば、自首したあと、顧順章は自供することはなかつた。頑強に自供を拒んだのは国民党側に就いたあと、たんなる自首人に終わるのか、自分の資本を高く売りつけることができるのか、彼にとつては必死の駆け引きであつたのである。

なお、顧順章の逮捕時と逮捕後の状況について、当地の国民党側の責任者、武漢行営偵緝処の蔡孟堅の一文がある。国民党に都合のよい観点で整理されたものに違いないが、国民党の公式見解として重要である。蔡孟堅は顧順章の逮捕に元武漢市委書記であつた尤崇新を手下に使つた。尤崇新がどのような経緯で蔡孟堅の配下になつたのかは、すでに前号で取り上げておいた（本誌第六一九号三一〇～三一頁）。ここでは尤崇新の救命懇願の行動から話を始める。

武漢の軍法処は犯人たちを捕らえて拘束したあと、犯人らは政治犯であり、また殺人犯であつたので、いずれも死刑の判決を下した。四月三十日に執行されることは、各犯人はみな知っていた。はからずも死刑の執行前、尤崇新は獄中から指を噛み切つて書いた血書を蔡に提出し、死の

前に、捜索員について街に出て共産党員を偵察し、ふたたび手柄を立てたいと望み、それで一死を免れたいと求めた。蔡孟堅の善良な気持ちは、軟化し、すぐに尤を弁公室に連れてこさせた。尤が跪くと、蔡孟堅は茶碗で彼の身体をコツコツとたたき、ただちに彼が前例にもとづいて街をぶらぶら歩き、何日か眼線てびきになることを同意した。思いもよらず、尤崇新が街をぶらぶら歩いて眼線になったその日の午後、かつて尤を指揮して暴動に参加した総指揮の顧順章を発見したのだ。顧は十六年（一九二七年）、白崇禧が軍を率いて上海に進攻したとき、共党の上海暴動総指揮であつた。尤はすぐに随行の行動員を手招きし、すばやく逮捕させた（そのとき、顧は手に白い手ぬぐいを巻いていた。たぶん共党が人と会うときものしるしであろう）。顧は漢口の陶陶大旅館に住むことを要求したので、彼の部屋に押し入ると、社交界の女性が部屋に留まっていた。すなわち顧順章が「化広奇」魔術団で使っていた助手で、顧はそのとき、すこしも気にかけていない様子だったが、軍法処に押送しようとする、大声で「蔡孟堅に会わせて欲しい」叫んだ。蔡は内心奇妙に思ったが、すぐに行動員に私のところに連れてくるよう命じた。顧は意外にも客人をもつて自ら任じ、蔡孟堅にこう言った。

「私はただの共産党ではない、共産党の中央常委であり、周恩来とは対等にふるまっている。共産党の党務は大部分を掌管しており、いかなる秘密機関も、私がすべて手配している。私はソ連で「ゲペーウ」の訓練を受けた、さらに上海共産党中央の紅色保衛局長だ。特務と言えば、私は特務の元締めだ。今回、漢口に来たのは、私の魔術を利用して、化広奇、魔術団の名義をカムフラージュにした。その主要な任務は、一つは、張国濤を鄂豫皖辺区に護衛して主席に就任させること、張は昨日、すでに私が人に掩護させて送り届けた。もう一つは、共党主席のため粵漢鐵道をへて株、萍から井岡山に行くルートを設置し、主席の駐所を準備す

ることだった。あなたは今日、私を訪ねてきたが、おそらく国共両党にはどちらもよい所がある。もう多言はしない。重要問題を残しておき、どうか私と蔣委員長が相談できるよう手配して欲しい」

蔡孟堅は顧順章の要求に対して、その間に行営主任の何成濬に会って話し合いをしてはどうかと言うと、顧は会ってもこれ以上の話はしないと答えた。また、どのようにして私の蔡孟堅という名字を知ったのかと訊ねると、顧は国民党のいかなる地区でも、反共を主持する人名はみな知っている。多くを聞く必要はないとしらを切った。

蔡孟堅はこの時、顧順章は国民党の中央内に潜伏していた大間諜銭壯飛の事については話が及ばなかったと述べている。蔡は成り行きからすこし鷹揚に構えるしかないと、顧順章を旅館に帰らせ、人をやって監視させ、南京の中央に送って処理することにした。このあと、何成濬主任に報告した。

「会う考えはない、あなたの意思とおりに南京の中央に送って処理したらよい、商招局の小型汽船を借り切り、憲兵隊を派遣して押送したらよい。もつともよいのはあなたが飛行機で先に南京に行つて、この事件を委員長と陳立夫先生に報告し、指示を聞いて処理することだ」

何成濬の忠告とおり、蔡孟堅はこの晩、人をやって招商局の上海に行く汽船の階上の食堂を借り切り、手下の行動員を派遣し、また憲兵団が派遣した憲兵と協議して顧順章を南京に護送していった。蔡孟堅自身は翌朝、漢口から南京に飛ぶ水上飛行機で南京に行き、すぐに中央党部に赴いて陳立夫秘書長に会い、徐恩曾もその場にいた。陳立夫は直接蔣介石に電話をして実情を報告し、また顧順章が蔣公をお伺いしてお目にかかりたいと申していると説明した。蔣介石は「蔡孟堅が顧といつしよに何時でも会いに来てよい」と述べ、漢口から顧順章を護送してきた汽船が下関に着くと、蔡孟堅は顧順章を引き取って下船し、陳立夫の指示

にしたがって、まず徐恩曾が中山北路三〇五号に設立した秘密弁事処に行つて待機した。

うへの蔡孟堅の顧順章との取り引きの状況は、蔡孟堅のちに整理したと思われる「共党は私を映画化して自ら悪跡を顕わす——金陵の夜の映画を撮り、天涯と壮別する」の話劇を演ず」（伝記文学 五十二—五）の記述にもとづいている。同じ蔡孟堅の回想文「二つの書き改めるべき中国近代歴史の故事」からかなり後に整理されたものだが、「共党の蒋介石暗殺未遂事件の摘発」、「共党中央特務の総首領顧順章の捕獲」、「共党の中央の核心組織への潜伏を破獲」などの主要な内容はさきの一文と変りないが、著者に有利に整理されたものとはいえ、いっそう具体的に語られている。

蔡孟堅のちに整理した回想文によれば、顧順章が逮捕される前後の状況は次のような真相であったようだ。蔡孟堅は自分を殺害しようとした尤崇新の才能にほれ込み、血書による命乞いを受け入れ、街に繰り出して共産党員の逮捕に従事させた。ねらいは最初から顧順章であった。顧順章は南京の上層部とすでに連絡があつて、投降を待ち受けていた。顧が尤に声をかけられたとき、手に白い布を巻いていたのは自分が顧順章であるという目印であつた。拘束された後、黄凱らが言うように将校以上の全員の取調べを受けたのであろう。黙秘し続けたので刑具が使用される寸前であつた。いよいよ軍法処での訊問に移されるとき、顧順章は国民党の上層部との取り引きを決心する。蒋介石との直接交渉が目標であつた。蔡孟堅との交渉は、顧順章は「客人をもつて自ら任じ」た。対等の関係に態度を変えたのである。蔡孟堅に身分を明かし、漢口に来た目的を話して、国民党への「自新」を告白し、このことは南京の上層部には通じていることを説いた。そうでなければ、蔡孟堅が重大犯である顧順章の要求とおり、旅館に帰すはずはない。蔡孟堅は顧の要求を聞

いて南京に移送することにした。蔡の上司、何成濬は結局、顧順章と面談することはなかった。何成濬は顧順章と南京の上層部がすでに繋がっているのを知っていたのであろう。だから、蔡孟堅に顧の移送方法だけを指示したのである。のちに中共特科が主張する、顧順章の逮捕を知らせたのは蔡孟堅と何成濬が南京の徐恩曾に宛てた秘密電報であり、すでに帰宅していた徐恩曾の留守にこっそり銭壯飛が盗み見したというのは、蔡孟堅の行動から見れば根拠がない。

さて、こうした顧順章の逮捕状況の中で、董健吾はいったいどのような役割を果たしたのであろうか。鄭先海は「脱險記」で董健吾をどのような人物に描こうとしたのであろうか。この疑問を解く手がかりは、董健吾が上海に帰つたときの周恩来が見せた態度に見出せる。

董健吾がもし二十四日の午前日に清汽船会社の洛陽丸に乗つたのであれば、漢口—上海間の運行表の計算によれば、上海到着は二十七日の午前である。じつさいは日清汽船の漢口出航は二十三日の午後で、上海到着は四日目、二十六日の午後であつた。NKKを日商汽船とし、出航日を二十四日の午前とした作者の虚偽は、いまは問わないとしても、上海に帰つてきた董健吾に見せた老王（董霞飛・董雲飛は歐陽新とし、周蕙は王弼とするが、筆者は老王と呼ばれていた陳賡ではないかと考える）と周恩来の言葉のうらに本音の心情が表れていた。

すでに述べたように、上海に到着した董健吾はいったん家に帰り、すぐに連絡員の老王に電話をした。老王は董の電話の声を聞くと、ひどくびっくりし、慌てふためいてどのようにして帰つてきたのか聞いた。董が船を変えたことを説明すると、老王はしばしばと一息をついて、ゆっくり休みなさいといったという。しばしばと一息をつく、の原文は「長長舒了一口气」である。別のテキストでは、「長長嘆了一口气」となっている。すなわち、ハーツとため息をつく、という意味で、しばしば、困っ

たことになったというため息をついたのであろう。何故、困ったことになったのか、董健吾は漢口で顧順章といっしょに捕らえられるはずであったからである。老王はどうしますかと周恩来に伝えた。

大中華飯店の五〇六号の部屋で待っている周恩来の前に董健吾が現れると、周恩来は進み出てしつかりと手を握り、「帰って来ないのかと思つた」と口を開いた。作者はもちろん危険な目に遭つた董健吾が無事帰つて来られたことを慰めた言葉として使つたが、どれほど危険であつたかという前提がある。周恩来が漢口に出発する前に董に托した任務を董はどのように達成したのか、董健吾は周恩来にどのように報告した。

「顧は漢口でいつもの癖が出、そのうえ、本来のものよりいっそうひどくなり、何度もやめるよう勧告したが、すべてどこ吹く風と聞き流された。彼が自ら思うことは、完全に特工員の組織規律を用いて約束を加えることはできない。もしふたたびこのようにするなら、逮捕される可能性は極めて大きい……対策の指示を請うために、出発に際してあなたが私に言い含めたことにもとづき、私は理由をつけて上海に急ぎ返つてまいりました⁵³」

董健吾の報告では顧順章は党の規則を全然守る気はなく、私には手に負えないので帰つてきたということ、そもそも董健吾は何のために漢口にいったのか、本人自身もともと分からなかつたのではないか。周恩来から「君は今回とても危険だつたんだよ、幸い身を脱することが速かつた、そうでなければきつと禍に遭つていたよ」と言われても、董健吾には何のことやらさっぱり理解できなかった。

そこで周恩来は董健吾のために九江での騒動を詳しく説明した。周恩来はこの情報を南京方面から得た確実なものだと述べた⁵⁴。南京方面からというのは徐恩曾の機要秘書になりすましていた錢壯飛からの情報に違いないが、それではまったく辻褄が合わない。時間的にも、情報の内容

からみても南京からの情報では決してない。周恩来の言動でさらに疑問があるのは、周恩来が董健吾に九江の騒動の経緯を語つたあと、周恩来、董健吾と老王、すなわち歐陽新あるいは王弼の三人が「意外の変」に対応する措置を相談したというのである。

周恩来は次のようなことを指示した⁵⁵。

①おおよそ上海で顧順章と関係のある地下党の機関と同志は通知を受けたら、必ず迅速に移転し、隠蔽すること。

②平時、関係がなくとも、しかし顧が知っている可能性があると推測されるあらゆる線索、連絡点はいっさいの工作をただちに停止し、服装や荷物を整え、命令を待つこと。

③董健吾は重病を理由にして、外地に行つて半年ほど隠蔽し、また家人に地下交通活動を停止することを告げること。

ここで董健吾が何時、上海に帰つてきたのが重要な鍵となるのだが、党史の見解は、南京の錢壯飛が二十五日の夜に漢口からの密電を解読し、娘婿をその日の夜行列車に乗せて、上海の周恩来に顧順章の叛変を伝えさせた。その日(二十六日)のうち、周恩来は党中央の緊急会議を開いて、中央の機関、会議場、幹部たちの住居の移転を大急ぎで行い、国民党の特務機関の襲撃に備えた。二十八日、顧順章の手引きで国民党当局の上海大捜査が行われたときには、もう中共中央のすべての機関はすっかり移転を終え、危機一髪で党の崩壊を免れたのであつた。

前述したように、董健吾が二十四日に漢口を發つたのであれば、上海到着は二十七日であり、上海では党組織は大移動の最中で黨員家族は大パニックに陥つていたのである。じつさいは、二十四日出航の日清汽船会社の船はなかつた。周蕙は二十三日に董健吾は出発したとするが、たしかに二十三日の船は存在したが、董健吾が急遽、帰りたいと顧順章に告白した日であり、顧順章は建国号の切符を買い与えた。二十三日であ

れば、その日の出発になる。周蕙はたんに董健吾の功績を賛美するため二十八日という「大捜査」の日から逆算して二十三日としただけであつた。

上海での周恩来の董健吾に対する行動はすべて上記のような事実を前提にしていなければならない。だが、じじつ、そのような事実はなかつたのである。しかし、ここでは作者の主張にもとづいて進めていく。

三人の相談が終えたとき、もう時刻は十二時を回っていた。老王は用事があるというので先に帰った。少々気持ち悪い話だが、残った二人は一つのベッドに臥し、夜を徹して語り合ったという。かすかに白んで露が降りるころになって二人はやつと互いに身体を大事にするよう述べて別れた。

この夜の周恩来は終始、董健吾への釈明に努めた。老王から董健吾が帰ってきたことを告げられると、困ったという思いだったに違いない。その気持ちがおのずと「帰って来ないのかと思つた」という言葉になつた。ところが、董健吾の報告を聞いてみると、帰ってきて申し訳ないという口ぶり、周恩来の陰謀を何も気づいていなかったようだった。これでうまくごまかせると安堵した。さきにもふれたが、周恩来が解釈したという董健吾が危険な目に遭つた状況はまるで出鱈目の話であつた。しかし、周恩来の真に迫つた話を聞いて、董健吾ははじめて恍然と大悟する。

董健吾は周恩来にとってこれほど利用しやすい人間はいなかつた。董健吾は前節で見たとおり善良な宗教家いがいの何ものでもなかつた。人を疑うことをまったくしなかつた。正義と信じたなら躊躇せず実践に移した。よく言えば誠実、悪く言えば凡庸な人物で、とても特務工作に向く人間ではなかつた。だから、一睡もせず夜が明けけるまで懇々と董健吾の漢口での行動を賛美する周恩来にいつその尊敬の念を懐くのであつた。

た。

しかし、これ以後、董健吾は共産党との連絡は途絶え、スノーとの再会に見るように党中央の指導者からは忘れ去られるのである。

では、鄭先海の『脱険記』は何を目的に書かれたのであろうか。作者は董健吾と直接の上司、老王の行動をこう語るのであつた。

「彼らは自己の生死の線を明らかにしたことを慶幸しただけでなく、党の機関と多くの同志が大きな災難を免れたことを慶幸した」

注

- ① 周蕙「董健吾」『中共党史人物伝』第六十八卷 中央文献出版社二〇〇〇年三三九頁
- ② 鄭先海の『董健吾漢口脱険記』という一文は、いま『縦横』編集部編『隠蔽戦線大写真』（中国文史出版社二〇〇一年）に同名の題で掲載している。また『武漢文史資料』二〇〇五年、第三期に「紅色牧師」董健吾漢口脱険記」と題して掲載されている。両者の間にはかなりの出入があり、どちらが原文かはつきりしないが、大写真版の方は冊子に入れるためかなり削減したと思われる。
- ③ 王光遠『紅色牧師董健吾』中央文献出版社二〇〇一年、八〇～八一頁
- ④ 張国濤『回憶録』第三冊、朝報月刊出版社、一九七四年、九〇〇頁
- ⑤ ③と同じ、八三頁
- ⑥ 王光遠『浦江魂—白色恐怖下的周恩来』中央文献出版社一九九九年一九四頁
- ⑦ 穆欣『隠蔽戦線総帥 周恩来』中国青年出版社二〇〇二年 三四七～三四八頁
- ⑧ 董霞飛・董雲飛『神秘的紅色牧師董健吾』北京出版社二〇〇一年 董健吾の伝記には、このほか董霞飛の「先父董健吾功成不居」（文史資料集編軍政人物編）、肖舟「董健吾・斯諾眼中的神秘牧師」（《人物春秋》二〇〇一年第四期）六権・張建平「董健吾生平述略」（《上海師範大學學報》一九八七年第二期）、「紅牧師」董健吾の地下生涯」（吳江雄編著『國民黨委員自述

的中共地下党」(上) 海天出版社)がある。

- ⑨ ⑧と同じ、一〇四〜一〇五頁
- ⑩ 拙稿「続ある追悼文―西安事件前後の周恩来、張冲そして潘漢年」『立命館東洋史学』参照
- ⑪ ③と同じ、二〇九〜二一〇頁
- ⑫ ①と同じ、三七九頁
- ⑬ ⑧と同じ、一六頁
- ⑭、⑮、⑯、⑰ ⑧と同じ、二九〇〜二九四頁
- ⑱ ②を参照、本節の目的は鄭先海の著作目的と内容の検証であった。
- ⑲ ハン・スーイン『長兄―周恩來の生涯』新潮社一九九六年、一〇〇頁
- ⑳ ①と同じ、三四〇〜三四一頁 周蕙によれば、「新世界飯店の老板は漢口の流氓幫派、洪幫の龍頭、長江偵緝隊隊長と軍統特務の楊慶山で、深く顧順章の安全を心配していた」という。ただここにいる軍統特務の軍統とは、国民党政府軍事委員会調査統計局の簡称で国民党の特務組織の一つであった。前身は復興社の中心組織、力行社の特務処で、三十八年に軍統局に改称された。すると、周蕙の説明は後年の材料をもとに書いたものであり、意図的に顧順章の叛変を示唆するものであった。しかし、これらの記述の中にも、楊慶山と顧順章はすでに接触があり、身の安全を心配していたという指摘は、顧順章の身辺を護衛する世界飯店のダンサーの存在を裏付けることになる。
- ㉑ ④と同じ、九〇二頁
- ㉒ 顧順章の来漢口の時期について、もつとも早い時期はウエイクマンがいう三〇年十二月で、蔡孟堅の「歴史故事」では三一年一月とする。また王章陵がいうように、顧は四月、上海から江西のソ区へ行き、帰途、武漢に立ち寄り、さらに張国濤を黄安七里坪に護衛し、その上、向忠発を井崗山に移転するのを護衛する任務があったのであれば、来漢の時期は四月の早い時期であったろう。そうすると、漢口における董健吾の役目などまったく顧順章の引き立て役しかなかったことになる。
- ㉓ ⑧の一〇九頁、二五九〜二六〇頁。①の三四〇頁、三七四頁
- ㉔、㉕、㉖、㉗ ①と同じ、三七四、三七六頁

- ㉘、㉙、㉚ ⑧と同じ、二六〇〜二六三頁
- ㉛、㉜、㉝、㉞ ②と同じ
- ㉟ 本誌、六一九号拙稿参照
- ㊱ 陸章陵「周恩來逃入赤区」『現代史料』第三集下編海天出版社 中華民国廿三年、三四五頁
- ㊲ 蔡孟堅の「共党把我搬上銀幕自顯惡跡―拍『金陵之夜』電影・演『別天涯』語劇」(《伝記文学》第五十二卷第五期)は、蒋介石暗殺未遂事件、蔡孟堅暗殺未遂事件の記述に、同著書の「歴史故事」と若干の相違があり、ずいぶん整理された形跡が見受けられるが、国民党の内情によって重要な事実は隠されているように思われる。
- ㊳ ③と同じ、三〇六頁参照
- ㊴ ③と同じ
- ㊵ 張国棟「細說中統局」、いま『中統特工秘録』所収の同著「中統從顧案血腥発家」による。五三頁
- ㊶ 聶榮臻「聶榮臻回憶録」上戦士出版社一九八三年、一二六頁
- ㊷ ④、⑤と同じ、本誌六一九号
- ㊸ 徐恩曾の顧順章事件の報告書とは、「消滅『紅隊』暗赤経験簡述」のこと。本誌六一九号、三〇六頁参照
- ㊹、㊺ 蔡孟堅「兩個可能改写中国近代歴史故事」(《伝記文学》第三十七卷第五期)および㊻を参照
- ㊻ 『日清汽船株式会社三十年史及追補』昭和十六年、九九頁
- ㊼、㊽ ②と同じ
- ㊾ ④と同じ、五三頁
- ㊿ 黄凱「我的特工生涯和所見所聞」『中統特工秘録』(江蘇文史資料第四十五輯)五頁
- 52 ③と同じ
- 53、54、55 ②と同じ、一一六〜一二八頁

未完

(衣笠総合研究機構特任教授)